第52回 SGRA フォーラム

日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性（1）

■ フォーラムの趣旨

渥美国際交流財団は、過去２回のアジア未来会議で円卓会議を開催し、日本研究のあり方について検討してきた。2015年７月に東京で開催されたフォーラム「日本研究の新しいパラタイムを求めて」においては、公共財としての日本研究に焦点を当てた。

東アジアにおける長期的な平和と安定を保障するものは、信頼に基づく協力関係である。1930年代の日中全面戦争までのプロセスが物語るように、経済・貿易関係だけでは、平和は確立できない。そして、終戦70年を迎えたいま、この地域の信頼醸成に不可欠な「和解」は未だ実現されていないという現実に、我々は直面しているのである。

戦後の東アジアでは、部分的に和解は達成された。しかし、このような和解は政府同士の「戦略的」判断と民間の「友好的」運動に支えられてきたものであり、持続できるものではなかった。現在、この地域で求められているものは、共有する「知」を基礎にした和解である。

日本研究をこのような「公共知」に育成することの意味は無視できない。近代日本はアジア諸国と複雑な関係を歩んできた。日本が経験した成功と失敗をアジア全体が共有する財産に昇華させることは、歴史を乗り越えることでもある。このような認識に基づいて、渥美国際交流財団は連続２年間「日本研究」をテーマに議論を深めてきた。

次のフェーズの課題は、「中国研究」や「韓国研究」も「日本研究」と同様に東アジアの「公共知」に仕上げる可能性を探ることである。しかし、三カ国が知の共有空間を構築するために、まず歴史認識の違いを意識しつつ、重なる部分を探し、造り出さねばならない。いままで三カ国の研究者の間ではさまざまな対話が行われてきたが、各国の歴史認識を左右する「国史研究者」同士の対話は、まだ深められていない。「国史たち」を対話させることで、共有する「日本研究」「中国研究」および「韓国研究」への道が開かれる。そして、このような研究環境の整備と研究成果の発信は、東アジアにおける和解の実現に大きく貢献するに違いない。

SGRAとは

SGRA は、世界各国から渡日し長い留学生活を経て日本の大学院から博士号を取得した知日派外国人研究者が中心となって、個人や組織がグローバル化にたちむかうための方針や戦略をたてる時に役立つような研究、問題解決の提言を行い、その成果をフォーラム、レポート、ホームページ等の方法で、広く社会に発信しています。研究テーマごとに、多分野多国籍の研究者が研究チームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから分析・考察して研究を行います。SGRA は、ある一定の専門家ではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することがSGRA の基本的な目標です。詳細はホームページ（http://www.aisf.or.jp/sgra/）をご覧ください。

SGRAかわらばん

SGRA フォーラム等のお知らせと、世界各地からの SGRA 会員のエッセイを、毎週木曜日に電子メールで配信しています。SGRA かわらばんは、どなたにも無料でご購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録していただけます。
http://www.aisf.or.jp/sgra/

日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性（1）

日　時　2016年9月30日（金）9：00～12：30
会　場　北九州国際会議場国際会議室
主　催　渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）
助　成　東京倶楽部

総合司会　彭 浩（大阪市立大学社会科学系研究院准教授）
開会挨拶　今西淳子（渥美国際交流財団常務理事）

※ 日中韓同時通訳付き

＜第一部＞

問題提起

なぜ「国史たちの対話」が必要なのか
―「国史」と「歴史」の間―　6

劉 傑（早稲田大学社会科学総合学術院教授）

日中韓の三カ国が知の共有空間を構築するために、まず歴史認識の違いを乗り越えなければならない。いままで三カ国の研究者の間では、さまざまな対話が行われてきたが、各国の歴史認識を左右する「国史研究者」同士の対話は、まだ深められていない。「国史たち」を対話させることで、共有する「日本研究」「中国研究」および「韓国研究」への道が開かれる。そして、このような研究環境の整備と研究成果の発信は、東アジアにおける和解の実現に大きく貢献するに違いない。

報　告

［報告1］

韓国の国史（研究／教科書）において語られる東アジア　10

趙 珖（ソウル特別市史編纂委員会委員長／高麗大学校名誉教授）

韓国、日本、中国を含めた東北アジアにおいて、歴史をめぐる争いが以前より厳しい状況にある。これにともなって各国では歴史教育に関する論争が強まっている。私たちは歴史教科書の内容を改めて見つめる必要がある。東北アジアの歴史問題は自民族中心主義と国家主義的な傾向から由来する。韓国もここから自由ではない。近来編纂され学校で使われた教科書、そして学界の日本関係史、中国関係史の叙述に基づいてその傾向を調べてみることとする。

© 2017 SGRA

［報告2］
中国の国史（研究／教科書）において語られる東アジア
―13世紀以降東アジアにおける三つの歴史事件を例に― 16
葛 兆光（復旦大学文史研究院教授）

本稿は13～16世紀における東アジアで起こった三つの歴史事件、つまり「蒙古襲来」（1274、1281）、「応永の役」（1419）、「壬辰丁酉の役」（1592、1597）を例にして、個別の国家史と東アジア史の差異を論じようとするものである。歴史を語る場合、もし数個の円心があれば、幾つかの歴史圏が現れ、その歴史圏が交錯するなかでは、国家史と異なる部分もかなり出てくる。一国の歴史を語る場合、そのようなところがしばしば見逃されるが、東アジア史を語る場合、この歴史圏の重なる部分を浮き彫りにする必要があると思う。

［報告3］
日本の国史（研究／教科書）において語られる東アジア 23
三谷 博（跡見学園女子大学教授）

日本における歴史研究と歴史教育は、いずれも日本史と世界史とに二分されている。それはいま生きている日本人の世界観に大きな影響を及ぼしているように見える。すなわち、日本とアジアを含む世界とを別物と見なし、「日本は世界（アジア）の外にある」という世界観である。
筆者は、グローバル化の進む世界でこうした世界観を維持することは不適切と考え、近年、日本学術会議の史学委員会の中で、高等学校の歴史教育の中に日本史と世界史を融合した「歴史基礎」という科目を新設すべきことを提唱してきた。現在、文部科学省はこうした提言を参照しつつ、次の学習指導要領において、類似した枠組みの下に「歴史総合」という科目を必修科目として新設することを検討している。
ここでは、しかし、現行の日本史教育が日本の外界、とくに東アジアをどのように扱っているのかを、主要な教科書を素材として分析し、その内容を確認した上で、将来における日本史の研究と教育の理想像を考えてみたい。

＜第二部＞
討　論

［討論1］
国民国家と近代東アジア 34
八百啓介（北九州市立大学教授）

［討論2］
歴史認識と個別実証の関係―「蕃国接詔図」を例に― 40
橋本 雄（北海道大学大学院文学研究科准教授）

［討論3］
中国の教科書に描かれた日本
―教育の「革命史観」から「文明史観」への転換― 44
松田麻美子（早稲田大学）

© 2017 SGRA

[討論4]

東アジアの歴史を正しく認識するために 52

徐 静波（復旦大学教授）

[討論5]

「国史たちの対話」の進展のための提言 55

鄭 淳一（高麗大学助教授）

[討論6]

国史における用語統一と目標設定 58

金 囝泰（高麗大学校人文力量強化事業団研究教授）

円卓会議・ディスカッション 60

モデレーター：南 基正（ソウル大学日本研究所副教授）、討論者：上記発表者ほか

閉会挨拶：李 恩民（桜美林大学グローバル・コミュニケーション学群教授）

あとがき 68

講師略歴 72

© 2017 SGRA

問題提起

なぜ「国史たちの対話」が必要なのか

―「国史」と「歴史」の間―

劉 傑
早稲田大学社会科学総合学術院教授

はじめに

まず、国史たちというタイトルについてだが、単に「国史」ではなく、あえて「たち」の二文字をつけることにしたのは今西さん（渥美国際交流財団常務理事）の発案である。この「国史たち」という言い方には、少なくとも二つの意味があると思う。

一つは研究・教育という視点で見たときに、東アジアの三カ国はそれぞれの国史教育あるいは教育の内容、研究の内容があって、その内容同士は必ずしも対話があるわけではない。それぞれの国は各自の視点から自国の歴史を研究・教育してきている。この（三カ国の）「国史」たちを対話させなければいけない、という意味での「国史たち」である。

もう一つは、国史研究者たちのことを指す。研究者同士も今までは共同研究の形でいろいろと交流を重ねてきたわけだが、研究者同士の交流の中身を見ると、例えば交流に参加している先生たちのなかには、それぞれの国の国史を研究する先生方というよりも、相手の国の近代史を研究している人とか、ある程度相手の国に対して理解のある人たちが交流し合っていた。あるいは仲間同士の交流であった。実際にはそれぞれの国の中で国史の研究、あるいは教育をなさっている先生方は必ずしも十分な交流をしてこなかったという状況がある。この「研究者」たちに対話をさせなければならない。その二つの意味があるというふうに理解している。そういう意味で「国史たちの対話」と名付けた。

今日の問題提起では、私は二、三簡単にお話をして、あとは先生方の貴重なご報告を拝聴したいと思う。

1.なぜ「国史たち」の対話なのか

最近の10数年間、東アジア三カ国の「歴史認識問題」をめぐる対話はさまざまな成果を生み出した。日中間の歴史対話のなかで、もっとも注目されてきたも

© 2017 SGRA

のは2006年から2008年にかけて行われた共同研究である。2006年10月に安倍総理大臣が訪中し、日中首脳は、両国の有識者による歴史共同研究を年内に立ち上げることで一致した。同年12月から2008年12月まで、合計4回の全体会合を実施し、2010年1月に両国委員による自国語論文が、9月には翻訳論文が発表された。日中関係史上、このような試みは初めてであり、その意義は大きい。

違う国の研究者同士の「対話」は、二つのレベルから理解することができる。一つは研究会や学会などの場を利用して直接会って意見交換し、共同研究を行うことである。もう一つは研究成果の形で、媒体を通して相手と間接的な対話を絶えず行うことである。先に述べた日中歴史共同研究において、回数は少なかったものの、国史研究者同士が直接対話したことは、大きな前進である。近年、このような対話はさまざまな形で行われ、相互理解も深められてきたのは事実である。しかし、共同研究の近代史部分の研究報告を確認すれば分かるように、日本側の論文は今までの中国側研究者の研究成果と中国側史料をほとんど参照することなく完成されている。一方、中国側の研究報告には、日本側の史料と研究成果が大量に用いられている。すなわち、両国の歴史解釈には多様な相違点がみられるが、近代の日中関係史研究は日本側の史料と先行研究に大きく依存している。このような研究状況のなかで、日本側の研究者に中国の研究成果と対話することの必要性を認識させることは容易なことではない。一方、中国側は、必要に応じて日本側史料を利用しているが、史料との対話は必ずしも十分に進められていない。

日中の歴史認識問題を解決する第一歩は、研究者同士が国境を越えて「知の共同体」を構築することである。共同体を構築するために、「共同研究」のなかで、今まで対話の少なかった国史研究者同士の交流を増やすことと、相手の史料や研究成果と対話できる研究者を育成することが重要であろう。

2.「国史」から「歴史」へ

1990年代、日本の大学は「国史」学科を「日本史学科」などへと名称を変更し、大学の国際化に対応してきた。京都大学日本史学専修の紹介文に次のような一節があり、日本の「国史」教育の変化を物語っている。

「日本史学は、この日本列島に生まれ、時とともに移り変わってきた社会や文化を、総体として明らかにしようとする学問分野です。（中略）もちろん日本史学専修でも多くの留学生を受け入れており、彼ら・彼女らにとって日本史は外国史であるわけですから、私たちは「日本人にとっての日本史」ばかりを研究しているのではありません。また、日本社会・日本文化は孤立して存在してきたのではなく、東洋・西洋の諸地域との関わりも重要な研究テーマになります。そうしたことを含めて、日本の大学で日本の歴史を研究する意味を、改めて考えてみてほしいのです」

日本で「国史」を「日本史」に変更した同じ時代に、中国では1990年に当代中国研究所を設立し、「中華人民共和国史」の編纂と史料の出版、公刊を開始した。「国史」の概念が多く使われるようになり、「国史」を使わなくなった日本と対照的である。もちろん、中国では「党史」との違いを強調するために「国史」

© 2017 SGRA

を用いることもある。一方、中国では教科書の「中国史」と「世界史」を統合して、「歴史」の教科書が作成され、教育の現場で用いられた。東アジア共通の「歴史」は書けるのか、知の共同体を模索するなかで、その可能性を検証する必要があろう。

3．対話できる「国史」研究者を育成すること

近年、大学の国際化にともなって、自国内の「国史」と「世界史」の対話が大きく進展したように思われる。これは留学生を多く受け入れ、留学生に対する教育指導体制を整備した結果でもある。最近では、「世界の中の日本」、「世界の中の中国」などの表現を頻繁に耳にするようになった。しかし、中国における日本研究はまだ発展途上にあり、日本の「国史」と対話できる中国の「国史」研究者はあまり現れていない。双方の「国史」研究者は翻訳史料や翻訳された研究成果を通して相手の研究者と対話しているが、長い間、中国の日本史研究に大きな影響を与えてきたのは井上清の『日本の歴史』であった。この著作は1974年に天津出版社で出版され、日本歴史のスタンダードとなり、2011年には陝西人民出版社から再版され、多くの読者に読まれている。

一方、日本の「国史研究」はアジアや世界とどのような距離感を維持するのか、大きな課題となったが、添付の最近２年の『日本歴史』（月刊雑誌／吉川弘文館）の掲載論文を検討すれば分かるように、「世界の中の日本」「アジアのなかの日本」という視点がないわけではない。『日本歴史』は外交史関連の論文や日本と外国との関係についての論文も今まで多数掲載してきた。しかし、日本史中心の雑誌を如何に外国との対話の場にするのか、今後の課題と言えよう。

「国史」の対話はより実質的なものにするために、現在の研究者同士の交流を進めると同時に、10年後、或いは20年後に本格的な国史対話が行えるような環境を整備することが重要である。留学生が増加する今日、双方の研究者が協力態勢をつくり、日本の言語と文化に精通する中国史研究者と、中国などアジアの言語と社会文化に精通する日本史研究者を育成することである。同時に、中国の日本研究の発展に、協力態勢を強化しなければならない。最近私がかかわっている「日中近代史事典」編纂プロジェクトは「国史」同士の対話であり、若手国史研究者のための環境整備でもあろう。

本日の円卓会議は、「教科書」を通して、各国の「国史」の現状を把握することから始まる。報告者の問題提起に続いて、教育と研究の二つの視点から「国史」対話の将来像を描いてみたい。

© 2017 SGRA

2015年―16年『日本歴史』掲載論文テーマ

掲載号	テーマ	著者
2015年2月	藤原房前と河内山寺・興福寺福田院	谷本　啓
	室町期荘園制下の在地勢力と五山制度	斎藤夏来
	天保期水口藩の家中騒動	荒木裕行
	平時における政軍関係の相克―軍隊の雪害対応を中心に―	吉田律人
2015年3月	隼人の「名帳」	菊池達也
	「申」型裁許状の再検討	黒須智之
	江戸町名主馬込勘解由の明治維新	髙山慶子
	江戸・明治期の日露関係―ロシアイメージを中心に	黒沢文貴
2015年4月	宛所を輻射状とする伊達政宗書状	羽下徳彦
	『寛政重修諸家譜』の呈譜と幕府の編纂姿勢	平野仁也
	浜口内閣期における陸軍の対内宣伝政策	藤田　俊
2015年5月	中世における誕生日	木下　聡
	台湾出兵と万国公法―欧米諸国の対応を中心に―	小野聡子
2015年6月	源経基の出自と「源頼信告文」	藤田佳希
	後北条領国における新宿立て―原兵庫助訴状の検討―	山下智也
	近世後期の天皇避諱欠画令	林　大樹
	戦争芝居と川上音二郎―『壮絶快絶日清戦争』の分析をもとに―	伊藤俊介
	徳川家達と大正三年政変	原口大輔
2015年7月	陽成・光孝・宇多をめぐる皇位継承問題	佐藤早樹子
	近世西日本の皮革流通と地域―筑前国熊崎村を事例に―	高垣亜矢
	昭和のなかの「明治」―明治百年記念準備会議を中心に―	小池聖一
2015年8月	足利義昭の大名交渉と起請文	水野　嶺
	江戸周辺の地域編成と御三卿鷹場	山﨑久登
	「精神的共同作戦」としての日独文化事業―一九四三～四四年の日本における展開―	清水雅大
2015年9月	山陰道節度使判官の長門守任官	松本政春
	戦国期越後における長尾晴景の権力形成―伊達時宗丸入嗣問題を通して―	前嶋　敏
2015年10月	公事方御定書の受容と運用―長崎奉行の「江戸伺」を通して	安高啓明
	衛生組合連合会と市制	白木澤涼子
2015年11月	『続日本後紀』の編纂―その原史料を中心に	多田圭介
	南北朝期大内氏の本拠地―弘世期を中心に	平瀬直樹
	日露戦前の水道敷設と地方都市政治―岡山市上水道敷設問題をとおして	久野　洋
2015年12月	出羽国の東山道移管と陸奥按察使	永田英明
	佐賀藩築地反射炉と鉄製砲	前田達男
	昭和研究会の組織と参加者	山口浩志
2016年2月	当任加挙考―平安時代出挙制度の一側面	神戸航介
	南北朝末期の醍醐寺三宝院院主と理性院院主―宗助の座主就任の背景	小池勝也
	備中一橋領における年貢収納と石代納―安石代と間銀の問題を中心に	東野将伸
	明治期陸軍における歩兵科連隊将校団の構造	大江洋代
2016年3月	三好本宗家と阿波三好家―洲本・尼崎会談を事例として	髙橋　遼
	長崎「海軍」伝習再考―幕府伝習生の人選を中心に	金　蓮玉
	日露戦後養蚕業の発展構造―西日本地域の成長と勧業政策・村落	加藤伸行
2016年4月	律令官人の朝儀不参をめぐって	虎尾達哉
	織田信長の上洛と三好氏の動向	天野忠幸
	細川幽斎島津領「仕置」の再検討	畑山周平
2016年5月	阿衡の紛議における「奉昭宣公書」	鴨野有佳梨
	明治二四年の皇室会計法制定―「御料部会計ノ部」の全章修正	池田さなえ
2016年6月	足利義昭政権と武田信玄―元亀争乱の展開再考	柴　裕之
	大念仏信仰の近世教団化と宗派間関係―宗派の形成をめぐる諸相	下田桃子
	近代東京における寺院境内墓地と郊外墓地	鈴木勇一郎
2016年7月	百済滅亡後における倭国の防衛体制―斉明紀「繕修城柵」再考	堀江　潔
	揺れる後花園天皇―治罰綸旨の復活をめぐって	田村　航
	近世長崎貿易での盈物の取締りと刑罰―長崎天保改革を転換点として	五味玲子
	華族の期待と三条実美の政治行動	刑部芳則
2016年8月	大化前代の隼人と倭王権	菊池達也
	安政四年における大廊下席大名の政治的動向―「同席会議」の上申書提出をめぐって	篠崎佑太
	ワシントン条約廃棄問題と統帥権	藤井崇史
2016年9月	駿遠両国における今川了俊・仲秋とその子孫	星川礼応
	終戦期の平沼騏一郎	手嶋泰伸

© 2017 SGRA

報告1

韓国の国史（研究／教科書）において語られる東アジア

趙 珖
ソウル特別市史編纂委員会委員長／高麗大学校名誉教授

はじめに

韓国、日本、中国を含めた東北アジアにおいて、歴史をめぐる争いが以前より厳しい状況にある。これにともなって各国では歴史教育に関する論争が強まっている。私たちは歴史教科書の内容を改めて見つめる必要がある。東北アジアの歴史問題は自民族中心主義と国家主義的な傾向から由来する。韓国もここから自由ではない(注1)。近来編纂され学校で使われた教科書、そして学界の日本関係史、中国関係史の叙述に基づいてその傾向を調べてみることとする。

1．前近代中国に対する叙述

私達にとって「中国」とは空間的に今の中国の地域にいた国々を指す代名詞である。中国の歴代王朝を一つの中国として認識し、前近代において東アジアの覇者はいつも中国地域の国であったとみている。このような中国中心の世界認識が韓国史とぶつかるところは高句麗史である。教科書では「高句麗は東北アジアの覇者として君臨した。満州と韓半島にわたる強大な領土をもって政治制度を完備した大帝国を形成し、中国と対等な地位で競った」と記述している。ここで言う東北アジアは中国を除いた東北アジアなのか？「中国と対等な地位」の中国はどの国なのか？　高句麗史をめぐる混乱は、隋と唐が高句麗を征服しないと真の東北アジアの覇者だと言えないので絶えず戦争を挑発し、言わばそれが高句麗滅亡の原因なのに、新羅が唐と連合して高句麗を滅亡させたという叙述にもつながる。

このような歴史認識はある種の「華夷意識」に基づいている。これは北方遊牧民族に関する叙述で赤裸々にあらわれる。高麗時代から遊牧民族は高麗を侵略しながら、時には銀を持って来て農具、食料と交換したという。そして、高麗の国力が強かったときは金国を「征伐」したといっている。彼らは征服しても構わない夷であった。

朝鮮時代の叙述では明との関係で、もう一度「先進文物の吸収を目指した文化

© 2017 SGRA

外交」という記述が登場し、女真との関係では「懐柔と討伐の交隣策」という表現が登場する。そして清に対する説明の中では次のような叙述がある。

「朝鮮に朝貢し、朝鮮がオランケ（夷）と見なした女真が建てた国と君臣関係を結び、屈辱的な降服をしたことは朝鮮人において大きな衝撃だった。以後、オランケにやられた恥をすすぎ、壬辰倭乱の時に助けてくれた明に対する義理を守って、清に復讐しようとする北伐運動が展開された」「清とは形式的な事大（従属）関係を結んだ」。

さらに清の発展を次のように説明している。「中国の伝統文化を保護、奨励し、西洋の文物まで受け入れ、文化国家としての面貌を整えていった」。オランケである女真が建てた清が漢族の文化と西洋の文明を結び、文化国家になったが、私達は形式的な事大関係を維持したという。漢族の伝統と近代の開発者である西洋の文明を吸収したが、オランケはオランケである、ということだ[注2]。

2．前近代日本に対する叙述

前近代中国に関する叙述では中国という代名詞がしきりに登場するが、「日本」という用語はまれである。「倭」と「倭寇」の話が多い。本来、日本という国名は7世紀後半に登場したものである。しかし教科書では、百済は日本九州地方に「進出」し、弁韓は倭に鉄を輸出し、百済復興運動では再び倭の水軍が百済復興軍を支援したと言っている。倭と日本を区分する線が曖昧だ。

日本に渡海した韓国文化を説明するときは日本という国名だけを使っている。「三国（高句麗、百済、新羅）の文化は日本に伝播され、日本の古代文化成立と発展に大きな影響を及ぼした」というのが結論である。しかし、高麗時代になったら日本は消え、倭寇だけ登場する。倭寇に対する定義はない。倭寇の侵略の歴史だけで、日本の中央政権に対する叙述は見えない。

朝鮮時代も日本との関係は倭冠から始まる。続いている倭冠の略奪に対し、対馬を「征伐」したという。「対馬征伐（己亥東征）」は日本から見たら侵略である。日本は侵略し、我らは討伐し進出した。―無論、「壬辰倭乱」と帝国主義日本の植民地支配は直接比較できない―「対馬征伐」の後、倭寇の要求を受け入れ、三つの浦（三浦）を開いて貿易を許可したとされている[注3]。

1592年（陰暦）4月に勃発した「壬辰倭乱」（訳者注：日本では一般的に文禄・慶長の役、中国では万暦朝鮮役という）は、朝鮮において朝鮮と明が日本と戦った戦争である。即ち三カ国が共有する歴史である。1945年の解放後、現代の韓国学界で壬辰倭乱は日本の侵略に対する民族的な抵抗と克服という「経験の歴史」と見なされ、最も熱い関心を受けた研究分野の一つとなった。この戦争に関する研究は帝国日本の侵略による苦しみを情緒的に癒すための時代的な要求だった。対外膨張期に日本がこの戦争を侵略戦争の必然性を正当化するための道具として利用したが、韓国では植民地支配による苦痛を減らすための分野だったのである。

研究主題としては義兵たちの活動と李舜臣（イ・スンシン）の海戦の比重が大きかった。このような研究傾向は今も続いている。そして政府がまともに役割を

© 2017 SGRA

果していない状態で、地方の士族と百姓、そして李舜臣のような英雄のおかげで戦争の克服ができたという共通する見方をもっている。彼らの活躍はもちろん歴史的な事実だが、無能な政府→日本の侵略→英雄たちによる克服という構図が必ずしも正しいとはいえない。

「長い政治・社会的な悪弊で朝鮮政府が侵略に対処できなかった」とか、「朝鮮王朝の首都陥落も間近であったが、義兵と英雄の活躍によって耐えられた」という評価は、実に朝鮮時代の歴史書から見えた常套的な内容であった。そして、この部分だけを取ってみれば近代以来、終戦以前までの日本における研究も類似な叙述をみせていた（注4）。このような研究は各時代の必要によって、それぞれ違った目的で作られたが、結果的に似たようなかたちで戦争を描いていたのではないか。

一部の研究者はこのような見方の持つ問題を指摘し、対案を提示したこともある（注5）。しかし、こういう研究も、依然として、韓国の壬辰倭乱史研究が勝利と敗北、善と悪を論じなくてはならないという観念から完全に脱皮することが難しかったことが分かる。

一方、韓国の壬辰倭乱史研究の傾向は、講和交渉に注目していなかった。講和交渉に触れるとしても、豊臣秀吉の無理な要求と、これを全然反映していない明の日本国王冊封の間隙を埋めるための欺瞞と失敗として書かれるだけだった。講和交渉は戦争についての有用な説明道具として使えるし、それから進んで、当時の東アジアのダイナミズムを把握するための道具としても利用できるにもかかわらず、そのような機会を得た研究はなかった。

講和交渉がこのように度外視された理由は何なのか。韓国では「国難克服史」という解放後の研究傾向のさなかで、朝鮮が一方的に敗北したのではないということが強調され、朝鮮が参与できなかった、そして復讐戦を妨害した交渉に対する認識は否定的だった。第２次世界大戦後、日本では戦争に関する否定的な認識、侵略戦に対する反省の雰囲気を反映した研究が行われたが、講和交渉の研究は相変わらず退けられた。韓国と日本、両国の学界は、人々が求める戦争のかたちと違う叙述をはばかり、講和交渉に関連する多くの史料は、研究者の目を引かなくなった。

一方、壬辰倭乱の研究において、朝鮮と明の関係は、だいたい明の参戦目的を「日本軍の侵略を朝鮮領土で阻止し、自国の領土を守ることにあった」ことを強調し、朝鮮に自国の利害論理を強いた明と、被害を受け抵抗しようとした朝鮮という構図の上で叙述された（注6）。

韓国の東アジア史教科書では国史教科書と違って壬辰倭乱を壬辰戦争、丙子胡亂を丙子戦争と書いている。名称の違いは教育目標の違いのためである。東アジア史教科書は「葛藤解消と平和追求」を究極的な目標としている。しかし、実際にその内容を読むと、平和に関するところはよく見えない。その理由は教育課程の成就基準と執筆基準にある。基準では戦争の原因よりは戦争の影響に対する理解を、戦争の影響では文化的側面における戦争の肯定的な影響を学習することが提示されたからである。東アジア史教育課程の課題は、前近代史においては東アジア地域の文化的な同質性が形成し持続されること、近現代史においては現代の葛藤を解消することにあるとされている。今後改訂される教育課程では、「17世

© 2017 SGRA

紀を前後にした時期、東アジアで戦争が起こった原因と影響を、国際関係と各国の政治社会の状況を踏まえて説明する」と、その目標を修正することが必要だと思っている（注7）。

国史教科書で朝鮮通信使に関する部分は次のように叙述されている。「徳川幕府は経済的な困難を解決し先進文物を受けるため、朝鮮に国交再開を要請した」「日本は朝鮮の先進文物を受け入れ、将軍が代わる時、その権威を国際的に認めてもらうため、朝鮮に使節の派遣を要請した」。相変わらず、日本は朝鮮の先進文化を求める存在として記述されている。しかし、このような叙述は17世紀以後日本が平和と安定のなかで発展したという記述と衝突する。それにつながる近代史においては日本の発展を「19世紀に西洋の列強と妥協し積極的な近代化政策を推進した結果、帝国主義列強に伍することができた」といっている（注8）。

全体的に教科書でみる前近代日本は、文化後進国としての先進文化の受益者、そして侵略者の姿である。そしてこのような認識は近現代の認識につながる。前近代日本の受益者、侵略者としての姿は一面的に妥当だが、正確ではない。日本を一つのまともな関係主体として見なさない国史教科書の認識は、韓国をめぐる現在の様々な難題を解決し、正しい韓国―日本関係を作るのに役に立つとは思えない。望ましい叙述は、過去の歴史がそうであったように、一国史ではなく、東アジア全体の広い視野から書かれる必要がある。これからはヨーロッパの国際歴史教科書協力運動を模範に、三カ国の学者、教師、市民が集めている歴史教科書をめぐる交流と協力活動を、どのような困難があってももっと活性化する必要がある（注9）。

3．近代東アジアに対する叙述

高校の国史教科書のみならず、韓国近現代史の教科書では中国と日本の近現代史に関する内容がほぼ出てこない。19世紀以後の東アジアは、一国の状況のみで自国史を述べること自体が不可能であるほどに、三カ国の歴史がお互いに絡み合っている。ところが、教科書ではこのような歴史の現実を気に留めることなく、「ナルシシズム」的な観点から叙述されているように見える。

日朝修好条規を始めとして海外へ門戸を開放し、壬午軍乱の当時に清国へ援兵を求めた過程から始まった韓国の近代史は、日本と清国という相手の対応がどのような「事情」から出たものかについて詳細に言及していない。我が国の歴史現実と関わりがある彼らの対応だけを並べているわけである。朝鮮が日本の植民地に転落したのに、なぜ日本が大韓帝國を植民地化しようとしたかについて、そして中国の満州が独立運動の基地としての役割を果たしたが、どうして他国の中で独立運動が可能になったかについて、詳しく説明してくれない。

日本が持っている性格が植民地の原因であり、植民統治を通じて遺憾なくそれが再現されたという前提の下で、植民地支配とそれに対する韓国民の抵抗が主に強調されてきた。相手が日本であるから、日本をもう知る必要はないという意識が敷かれているのである。中国は日本とは異なり、独立運動の基地ながら、活動の支援勢力であったというイメージだけが繰り広げられている。このように現代

© 2017 SGRA

史の叙述でも、東アジア史で韓国の存在が顧みられない近代史と事情がほぼ同じように見える。

1945年以来、韓国（北朝鮮を含む）と日中の間では、「断絶」の歴史が持続され、今もまだ繋がれることがない域内の関係がある。そして、米国が東アジアの現実に深く介入しているが、これに対する叙述は全然足りないにも拘らず、内部政治や経済や社会に関する説明だけが溢れている。世界の多くの国々の世界史の教育で代表的な国際戦争として挙げられる朝鮮戦争の場合も、それに参戦した各国の論理が紹介されていない。米国、ソ連、中国はもちろん、他の国々の参戦と介入については、相変わらず説明が足りないきらいがある。他の時期よりも近現代史の場合、中国史のみならず、日本史と連結して説明することによって、脈略を理解できるようになる。だが、このような問題意識、言い換えれば、東アジアという観点が既存の歴史教育にはなかった。自分を読むことも重要な仕事であるが、如何に他人を読めばよいのかという問題も、自分を省みさせる準拠になる(注10)。

これから編纂される歴史教科書は、中国と日本を含む東北アジアの周辺に位置する国々に対する叙述が、人類の普遍的な価値を目指し、お互いの理解と協力を増進する方向で行われる必要があると思う。

（原文は韓国語。翻訳：金 圀泰）

＊＊＊

※当日の問題提起を受け、発表の最後に趙珖先生から以下の提案がありました。
続くコメントやディスカッションでも話題にのぼりましたので、ご紹介します。

日中韓の関係史辞書の提案

ここで一つの提案をしてみたいと思います。先ほど問題提起をしていただいた劉傑先生のお話の中で、「日中近代史事典」編纂プロジェクトの話がありましたが、日韓、あるいは日中の歴史関係事典にとどまるのではなく、日中韓の関係史辞書をつくってはどうでしょうか。歴史的事件を、―全て入れる必要はありませんが―、日中韓三カ国がそれぞれに異なった理解をしている、あるいは共有しているなど、三カ国がそれをどのように見ているか、各国の学者がまずそれを整理して、それぞれの国が持っている認識の特徴をあらわさなければならないと思います。その違いが何であるかについて、日中韓の三カ国が正確に理解したときにはじめてその違いを克服する、新しい関係の歴史が可能になってくると思います。日中韓関係史辞書の再版が出るたびに、三カ国の平和が進展し、また三カ国の国史中心の認識も改善されていき、より望ましい方向へ展開していくと信じております。

© 2017 SGRA

〈注釈〉

（注１）以上、고영진、「 한국사교과서에서 보이는 전근대 일본 」、『역사문화연구』25、2006 より引用。

（注 2）김정인、「 동아시아사의 재구성 : 고등학교『국사』『한국근 · 현대사』교과서를 중심으로 」、『한국사회교과교육학회 학술대회지』、2008 より引用。

（注 3）김정인、「 동아시아사의 재구성 : 고등학교『국사』『한국근 · 현대사』교과서를 중심으로 」、『한국사회교과교육학회 학술대회지』、2008 より引用。

（注 4）日本の侵略と戦争初期の朝鮮の惨敗には対策を作らなかった朝鮮の責任もある、といった叙述は『南朝平壤録』『懲毖録』『武備志』に見られる。このような朝鮮や明清の著作に接した後に書かれた日本の文献にも受け入れられた。

〔김시덕、「 근세 일본의 대외전쟁 문헌군에 대하여 」、『임진왜란 관련 일본 문헌 해제』、도서출판 문、2010；金時徳、『異國征伐戦記の世界：韓半島・琉球列島・蝦夷地』、笠間書院、2010
このような論理は 19 世紀後半日本の対外膨張と侵略戦争の雰囲気のなかで作られた著述に利用された。そして、1945 年解放以後の韓国学界はこの叙述を再生産してきた。

（注 5）許善道、「壬辰倭亂論 ―올바르고 새로운 認識― 」、『千寛宇先生還暦紀念　韓國史學論叢』、正音文化社、1985；崔永禧、「壬辰倭亂의再照明」、『國史館論叢』30、1991；崔永禧、「壬辰倭亂에 대한 理解의 問題點」、『韓國史論』22、國史編纂委員會、1992；崔永禧、「壬辰倭亂에 대한 몇 가지 意見」、『南冥學研究』 7 、1998

（注 6）김경태、「임진전쟁기 강화교섭 연구」、고려대학교 박사학위논문、2014

（注 7）차미희、「고등학교『동아시아사』의《17 세기 전후 동아시아 전쟁》분석」、『한국사학보』56、2014

（注 8）김정인、「 동아시아사의 재구성 : 고등학교『국사』『한국근 · 현대사』교과서를 중심으로 」、『한국사회교과교육학회 학술대회지』、2008

（注 9）고영진、「 한국사교과서에서 보이는 전근대 일본 」、『역사문화연구』25、2006

（注 10）고영진、「 한국사교과서에서 보이는 전근대 일본 」、『역사문화연구』25、2006

© 2017 SGRA

報告2

中国の国史（研究／教科書）において語られる東アジア

―13世紀以降東アジアにおける三つの歴史事件を例に―

葛 兆光
復旦大学文史研究院教授

はじめに

近世の東アジア史、特に13世紀以降の歴史において、「ある事件」の重要性は各国の国史から見ればそれぞれに異なるが、東アジア史として見たときに相当重要な意味を持つものがある。

それらの事件の中に、私は「蒙古襲来」（1274、1281）、「応永の役」（1419）、「壬辰丁酉の役」（1592、1597）という三つの事件を取り上げて論議したいと思う。上述の三つの事件はすべて東アジアの中日韓三カ国の歴史に関連しているので、各国の国史がどのようにそれらの事件を描いているかを観察すれば、「国別史」と「東アジア史」との違いを見つけられるかもしれないし、自国の立場を固持すると、歴史研究上、何らかの「死角」や「盲点」が出てくることが分かるようになるであろう。

以下において、私は中国において最も代表的な国史の著作である①翦伯賛の『中国史綱要』、②範文瀾の『中国通史』、③郭沫若の『中国史綱』、④白寿彝『中国通史』を主な研究対象とし、同時に中国大陸、台湾、香港で出版された歴史教科書を参照しながら、中国の通史類の著作、とりわけ歴史教科書について簡略な分析を行うことにする。

1.「蒙古襲来」に対する各国のとらえ方

「蒙古襲来」（文永・弘安の役）は、日本の歴史においてはいうまでもなく第一等の重大な事件である。川添昭二は『蒙古襲来研究史論』の中で、その侵入事件は最後に厳重な征服または植民地になってしまう結果にはならなかったが、日本人の歴史記憶に多大な陰影を投じたと指摘した。したがって、それ以降の日本の歴史文献には関係回想や想像または描写が繰り返された[注1]。日本史研究の代表者である原勝郎も、中国史研究者の代表である内藤湖南も、二人そろって、「こ

© 2017 SGRA

の事件は日本の歴史にとって重要である」と見ている。彼らの分析によると、この事件によって、日本の文化に独立の端緒が開かれた。それから、日本は初めて「神国」と思われるようになり、日本人は意志的に自国の文化を発展させ、中国中心の「華夷秩序」から離脱していわゆる日本型の「華夷秩序」を形成したわけである。

または13世紀より14世紀かけての高麗にも、蒙古という要因は、その歴史に重大な意味を持つものである。蒙古にコントロールされた高麗時代では、蒙古人が日本を侵略する際、高麗はその前線基地になってしまい、また蒙古帝国が四辺へ進出する際も、高麗人は頻繁に徴兵され、高麗女子も蒙古人のために献身するように求められ、耽羅（現在の済州島）も蒙古人の馬を飼う牧場となってしまった。さらに、高麗は蒙古から妃を娶らなければならないし、人々の名前も蒙古化させられ、官吏も蒙古風の髪型にさせられ、国全般が「蒙古化」されてしまった[注2]。したがって、朝鮮史においても、蒙古侵入は大きな歴史事件である。

しかし、中国の歴史著作の中では、蒙古／元朝は「自国史」と見なされたため、以上のような事件はしばしば「中外関係史」の枠に盛り込まれた。これは「自国」の歴史だから、隣国への侵略とは認めるが、奇異なところでは、中国の歴史研究者は蒙元を自国の一王朝と見なし、それで蒙古と日本や高麗との間に起こったこれらの事件を「中外関係」の枠に盛り込み、重くは見ていないようである。一方、以上のような侵略や拡張行為を、意識的か無意識的か、「蒙古帝国」の行為であると見なし、蒙古人はユーラシアに亘る大帝国を樹立するため、このような拡張行動を行ったとする。

総じて言えば、この事件は中国の歴史叙述の中では、たいした事件ではなく、ただ「中外関係」の枠の中で起こった微々たる事件に過ぎない[注3]ととらえ、殆ど簡略な叙述になっている[注4]。たまに分析があっても、不思議な言論が交じっている[注5]。

2.「応永の役」に対する各国のとらえ方

所謂「応永外寇」（1419）は日本側の言い方である。14世紀の後半、東アジアの政局全般には重大な変化が見える。中国の場合は、元王朝が明王朝に引き継がれ、蒙古帝国が漢民族の王朝に変わった。高麗の場合は、高麗が朝鮮に変わり、李成桂が新しい朝鮮王国を建てて大明帝国に認められた。日本の場合は、足利義満が分裂状態を終え、統一を実現し、さらに、明の朝貢体制に加入しようという姿勢を示した。明王朝の初期、特に政権が樹立したばかりの洪武朝は、国際協調の政略を確立し、若干の「遠征しない国」のリストを作り上げ、東アジア三カ国からなる「国際」関係は新しい時代を迎える。

しかし、永楽皇帝は洪武朝の「国際協調」の政策を変え、安南に兵を用い、朝鮮へ圧力をかけた。一方、李成桂と足利義満が1408年に亡くなったことから、日朝双方の政策にも変化が見えた。後継者の足利義持はその父の政略をチェンジし、足利義満時代の穏健な外交方式を一変し、朝鮮に対しても見下げるような傲慢な態度をとった[注6]。しかし、義持の意図したとおりには事は運ばない。李朝

© 2017 SGRA

の太宗も態度強硬な国王で、かえって1419年に日本の対馬へ侵攻を始めた。これは日本で「応永外寇」と呼ばれ(注7)、日本の朝野（朝廷と民衆）に大きなインパクトを与えた。この事件を当時の「蒙古襲来」と同じくらい大きな危機を日本にもたらしたと思う人さえもいた。朝鮮と大明の連合によって、両側からの敵の攻撃を避けようとした日本はやむ得ず外交政策を調整しなければならなかった(注8)。この年の12月、戦争問題を解決するため、日本は博多・妙楽寺の僧侶無涯亮出倪を朝鮮へ派遣、両国の関係はようやく緩和された。この事件はその後のバランスの取れた東アジア国際関係を再構築する大きなきっかけとなったと私は見ている。

何故この事件が東アジア史にはきわめて重大な事件であるといえるのか。事実上、この事件の背後に明の影が見え隠れしている。朝鮮の出兵は言うまでもなく明から支持、少なくとも黙許を得たはずである。当時、明太宗は朝鮮に対して、朝鮮にとって当面の用務は倭寇を治めることだと主張した。住民を沿海地域から内陸部へ移住させる一方、軍隊を動員して日本が占領した島を取り囲んで敵を残滅するように、明は朝鮮へ提言した(注9)。明の永楽時期になると、明成祖は更に明太宗の国際協調政策を大幅にチェンジし、対外強硬策に転じた。朝鮮から「日本が戦艦を製造して中国を侵攻しようとしている」という情報を受けたため、日本への不満も高まった。日本が朱元璋の画像を的にすると言う口実を作って、明成祖は「万隻の船を派遣して討とう」と威嚇した(注10)。後に、朝鮮が進んで対馬を武力で占拠したことも、これと関係があるだろう。同じ年（1419年）の6月、明の総兵（統帥か）劉江が遼東半島の望海埚で上陸する倭寇を全滅させたことも朝鮮の出兵とある程度の呼応関係があると思われる(注11)。そういう事実から、日本は朝鮮の対馬出兵の背後に明の影があると警戒した。

応永の乱以降、日本と朝鮮が互いに妥協したことは、日本、朝鮮と明を含む東アジア全般を最終的にバランスの取れた新しい国際局面へ向かわせた大きな事件であったといえる。しかし、この事件は中国の歴史著作に殆ど記載されていない(注12)。東アジアにおいてこんな大きな事件が何故中国の歴史叙述には欠落しているのか。検討する必要がある。

3.「壬辰丁酉の役」に対する各国のとらえ方

「壬辰の役／文禄の役」（1592）とその後の「丁酉の役／慶長の役」（1597）は、上述の蒙古－日本、日本－朝鮮間で起こった事件と比べれば、東アジアの中日韓三カ国共に全力を挙げて直接に参与し、投入した兵力も莫大なので、この戦争は三カ国ともの文献に多くの記載が残り、後世の各種の国史にも、詳しい叙述がある(注13)。

しかし、この戦争についての呼称はそれぞれ違う。韓国ではこれを「壬辰倭乱／丁酉倭乱」と呼ぶ。日本ではこれを「文禄の役／慶長の役」と呼ぶ。中国ではこれを「万暦東征／抗倭援朝」と呼ぶ。呼称が異なる背後に、それぞれ立場の明らかな違いも見えてくる。各国の歴史文献に残る記載が違うほか、現代の歴史叙述もそれぞれ異なる。中国の歴史著作では、豊臣秀吉の出兵を野心膨張の結果、東アジアで大帝国を樹立しようとする「侵略」と見ている(注14)。その点から言

© 2017 SGRA

うと、朝鮮と中国の歴史著作はほぼ同じであるが、日本さえも「侵略」を否定していない。しかし、戦争についての描写は、各国は自国の歴史文献に基づいて、立場も違うし、同じ「壬辰の役」に関しても、叙述に微妙な差がある。例えば、日本の場合、壬辰の役については、朝鮮の妥協と日本の強硬を浮き彫りにしている。日本側が出した講和条件は①明の皇帝の娘は天皇と結婚、一種の「和親」関係を結ぶこと、②明は日本と勘合貿易を行うこと、③朝鮮南部を日本へ割譲、だったという(注15)。あせって講和しようとする小西行長が当時、以上の意思を十分伝えられなかったため、1596年優勢に立った明が日本へ使者を派遣して豊臣秀吉を「日本国王」に冊封し、日本の朝貢を許す結果に導いた。それで、豊臣秀吉がかっとなって２回目の戦争（1597～98）を引き起こしたという(注16)。それに対して、中国側の記載は、そういう内容は全く見当たらない。それどころか、中国通史類の著作には、ただ豊臣秀吉が壬辰の役で失敗したものの、「野望を失わず、捲土重来のため、わざと明に講和を求め、明の撤兵を狙って新しい攻撃を準備した」と叙述した。明も妥協して、それで「豊臣秀吉のわなにはまって、守勢に回ってしまった」(注17)。

いうまでもなく、現代の一国の歴史著作は、（国の）自尊のため、それぞれ自分が強調したい一面を強調している。中国の歴史著作のように、中国の援軍が朝鮮の運命を救う重要性を強調する一方、明の援軍（朝鮮も含め）の日本に対する勝利をも誇張している。

4.三つの事件を東アジア史の視座から見る

もし我々が国家／王朝の立場を超えて、東アジア史の視座、東アジア全体の視角から以上の三つの歴史事件を見直せば、以下２点の結論を出せるのではないか。①元の日本侵略（または高麗を従属国にすること）は、東アジアの政治局面に変化をもたらしたのみならず、文化の面においても各国の自我の意識を喚起し、東アジアでは「中国を中心にする」風潮が続けられなくなった。政治的には朝貢あるいは冊封体制、文化的には漢・唐・宋の中国を習うあるいは模倣する風潮が次第に変わっていき、政治上の自国中心主義と文化上の独立意識が芽生えてきた。②「応永の役」の発生及びその解決は、東アジア三カ国の間を、再度バランスが取れた関係に導いた。また、その後の百年ないし数百年の東アジア国家関係の安定に導いた。朝鮮の「事大主義」を軸に、明と朝鮮の間は「朝天」（天朝への朝貢）を通して朝貢体系を継続する一方、日本と朝鮮の間は「通信」（新書を通わすこと）を通して対等の国家外交を継続した。それに陸路と海路両方の貿易も加えて、明清中国、李朝朝鮮、藩政日本の間、豊臣秀吉の朝鮮侵略時期を除けば、全般的に長らくバランスが取れていた。西洋人が東洋へ進出する前、基本的に安定的な東アジア国際秩序が続いた。

「壬辰の役」の発生は、それまでの安定した東アジア国際関係を大きく揺らしたし、その後の東アジアが共有するアイデンティティーの崩壊にも伏線を張った。しかし、この事件は速やかに収まり、東アジアの世界もまた「壬辰／丁酉の役」以降構築された国際局面に戻った。上述するように、その局面は19世紀に西洋

© 2017 SGRA

諸国が武力を背景に東洋に進出して、東アジアを欧米が主導する新しいグローバル秩序に引きずり込むまで続いた。

しかし、もし歴史学者が単なる自国の立場を固持し、視野を現代国家の国境線に限定して地域の連動関係を考えなければ、歴史には必ず「死角」や「盲点」などが出てくる。中国の歴史著作は、蒙元の日本侵略と高麗支配はただ蒙古人／蒙元王朝の世界支配の野心の現われに過ぎない、朝鮮の対馬への侵攻もただ隣国同士の紛争だと言い張り、「壬辰／丁酉の役」に至ると、日本は侵略者であり、中国は朝鮮の国際的な友人であり、両国が手を携えて日本侵略軍を打ち負かしたと明言する。しかし、もし歴史学者が以上の話題を、東アジア史を視野に入れて見直せば、新しい認識が出てくるのではないか。

とにかく、東アジア史と国別史の違いから、歴史の叙述はもし一つの円心（国）だけだと、その叙述は必ず中心と周辺があり、中心が明晰で周辺は常に朦朧になってしまうということが分かる。歴史学者がもし焦点を常に中心に当てると、周辺はしばしば忘れ去られ、あるいは捨てさられてしまう。しかし、歴史の叙述にもし幾つかの円心があれば、つまり、幾つかの歴史圏を設定すれば、これらの歴史圏の交錯するところに、幾つかの重なる部分が見えてくる。東アジア史は幾つかの歴史圏の交錯からなると思う。数年前、私は「周辺から中国を見る」と唱えた。実は「周辺から日本を見る」「周辺から韓国を見る」「周辺から蒙古を見る」とも私は唱える。今のところ、私はむしろ「アジアの中の中国史」を書くべきではないかと強く思っている。私はこれらの交錯する「周辺」から歴史を見る、拡大した「アジア」の中に歴史を見直すべきだと強く願っている。そうすれば、色々異なった風景が見られるのではないか。一人の歴史学者として、歴史がまだ形作られていない（つまり著作という形になっていない）現場で歴史を想像すべき、または国家の国境線（現代国家の国境線は後に形成されたものである）を超えて、広い視野の中に歴史を観察すべきだと思っている。もし、現在の国家の国境線を固持して古代の交錯した歴史を遡ると、往々にして、固定したあるいは固持した「中心―周辺」の歴史構図になってしまい、「周辺」は忘れられてしまう。今の「周辺」は当時の「中心」であるかもしれない。自国中心の歴史叙述は、政治―文化の価値観に歴史的な差異があるため、歴史評価の偏りも生じ易い。

（原文は中国語。翻訳：徐静波）

© 2017 SGRA

〈注釈〉

（注１）川添『蒙古襲来研究史論』（東京雄山閣、1977）は蒙古襲来という事件が日本に残した深刻な影響について詳しく論じた。その研究によると、早くも1293年前後既に肥後国武士竹崎季長の武功を描いた『蒙古襲来絵詞』（京都東山御文庫蔵、二巻）」がある。その後の江戸時代、臨済宗僧侶の瑞渓周鳳の『善隣国宝記』（1470年増補）、儒医の松下見林の『異称日本伝』（上中下三巻、1688年の自序あり）、津山元順（？～1784）の『蒙古襲来記』及びその養子の津山元貫（1734～1815）の『参考蒙古入寇記』などがその事件についての記載がある。その以降、更にさまざまな関係書籍が、例えば『元寇始末』『蒙古寇記『蒙古諸軍記弁異』『元寇記略』『蒙古襲来記』及びその養子の津山元貫（1734～1815）の『参考蒙古入寇記』などがその事件についての記載がある。その以降、更にさまざまな関係書籍が、例えば『元寇始末』『蒙古寇記『蒙古諸軍記弁異』『元寇記略』などが出版された。

（注２）宮崎市定が言うように、「中世以降、朝鮮が最も外国化された時代はこの時（高麗忠烈王以後）である」。宮崎市定『中国史』（中国語訳、浙江人民出版社、2015年）第三篇「近世史」の三「元」、237頁；辛顒王時代（1376年、明王朝成立してからも8年目）になっても、高麗は依然として北元の年号「宣光」を使い、使者を北元へ派遣した。当時の高麗では、「町の中には蒙古風の服（胡服）や髪形をしている人は既に多くなった。」明王朝の使者が来る時、当局は慌しく「胡服」の禁止令を出し、「明の制度により百官冠服が定められた。」呉晗が整理した『李朝実録の中の明清に関する資料』第一冊、76－79頁。

（注３）翦伯賛の『中国史綱要』（北京大学出版社、増補本、2006）下449頁、「元朝対外関係」を語る場合、「元世祖の時、数度兵を挙して近隣国家へ侵入した」、「元十一年（1274）、十八年二度と日本へ出兵」という表現しかない。また、『中国史稿』（人民出版社、1883）では、400字の叙述があるものの、「元三年から元十年に、前後五回使者を派遣して日本の来朝を勧誘したが、何れも日本政府より返答を拒絶された。」という表現がある。二回の戦役について叙述はしたが、特に分析などはしていなかった。範文瀾の『中国通史簡編』（河北教育出版社、2000年増刷）下には、「日本東征」の事件に殆ど触れなかった。今日に至っても、最新の各種の歴史著作、例えば李学勤·郭志坤編著した「中国歴史詳述叢書」の中の温海清著の『元史』（上海人民出版社、2015）もこの事件を無視している。

（注４）対照的に、西洋の学者、例えばTimothy Brookが元明の歴史を書く場合、「蒙古襲来」の意義を重視している。Timothy Brook:The Troubled Empire: China in the Yuan and Ming Dynasties, “History of Imperial China 5”, Harvard University Press, 2013.

（注５）例えば昔出版されたある有名な中国歴史教科書、即ち繆鳳林の『中国通史要略』（南京鐘山書局、1933、商務印書館、1946）の第八章には、この二回の戦役を通して「日本人は蒙古兵の武威に震え、その後ことなし云々」。116頁。

（注６）たとえば、朝鮮に対して「国王」を使用せず、「征夷大将軍」と自称し、国書にもただ「日本国源義持」と記し、つまり日本の大将軍は朝鮮国王とは対等な関係であると示し、更に日本への朝鮮国書に明の「永楽」年号を使用することに不満を漏らす。もし、朝鮮が自国を明の従属国に下げたら、日本も同様に明の従属国に下げられてしまったのではないかと足利義持は思った。

© 2017 SGRA

（注 7）朝鮮の太宗は対馬襲撃を通して倭寇問題を根本的に解決しようと思ったらしい。戦争中、双方の死傷者は 3800 人になり、対馬藩の若い藩主が朝鮮に講和を申し出た。朝鮮は対馬を慶尚道の版図に入れ、対馬の住民も巨済島へ移動させた。

（注 8）「蒙古来襲」の記憶がまだ強く残っているためか、日本は依然として中国へ高い警戒心を持つ。李朝朝鮮の『世宗実録』巻十（1420 年）に使者団の通事尹仁甫の「復命書」が収録されている。その中に「臣等初到其国，待之甚薄，不许入国都。馆于深修庵。……继有僧惠珙来问曰：闻大明将伐日本，信否？答曰：不知也。珙曰：朝鲜与大明同心也，何故不知。先是，大明使宦者敕曰：若不臣服，与朝鲜讨之。继而使者畏害而逃，故疑而问之」という文言がある。

（注 9）吴晗辑《朝鲜李朝实录中的中国史料》（北京：中华书局，1962）第一册，洪武二十年（1387），73-74 页。

（注 10）同上，第一册，永乐十一年（1413），255 页；永乐十四年（1416），265 页。

（注 11）这一年（永乐十七年，1419）六月，明朝与日本之间也出现冲突。《明史》卷三二二《外国二·日本》中记载较详细，“倭船入王家山岛，都督刘荣率精兵疾驰入望海埚，贼数千人分乘二十舟，直抵马雄岛，进围望海埚。荣发伏出战，奇兵断其归路。贼奔樱桃园，荣合兵攻之，斩首七百四十二，生擒八百五十七”。8346 页；《明实录》中，“都督刘荣”作“都督刘江”，说“辽东总兵官中军都督刘江以捕倭捷闻”，在望海埚“擒戮尽绝，生获百十三人，斩首千余级”，《明太宗实录》卷二百十三，2141-2143 页。又，可以参看明代严从简《殊域周咨录》中的“日本”部分。

（注 12）郭沫若、翦伯赞、范文澜の著作にこの事件についての叙述は皆無である。殆どの中国の歴史著作はこの事件を無視している。

（注 13）中文论著最详细的研究是：李光涛《朝鲜“壬辰倭祸”研究》（中央研究院历史语言研究所专刊之六十一，台北，中央研究院史语所，1972）。日文论著方面，可以参考：石原道博《文禄、庆长の役》（东京：塙书房，1963）；因为不懂韩文，我仅参考了已经译为中文的崔官《壬辰倭乱——四百年前的朝鲜战争》（金锦善、魏大海中译本，北京：中国社会科学出版社，2013），但此书主要讨论壬辰之役的影响，尤其是在日韩文化与文学中的影响。

（注 14）翦伯赞《中国史纲要》下册 531-532 页，对此有近千字记载，但主要说的是（1）丰臣秀吉侵略朝鲜，进一步侵略中国，（2）1593 年打败日军最精锐的小西行长军队，收复平壤与开城，日军退守釜山，（3）石星妥协求和平，1597 年日军再度入侵，（4）丰臣秀吉死，日军于朝鲜南海被灭，战争胜利。结论是“日本侵略朝鲜战争的失败，主要是由于朝鲜人民的坚持抗战，而明军的两次援助，也起了重大的作用”（532 页）。郭沫若《中国史稿》第六册，572-578 页。主要根据吴晗《史料》、《明史》、《明史纪事本末》等中朝文献，对整个过程做了更加详细的记录，对于第一次援助朝鲜，与翦伯赞书不同的是，承认只是“形成对峙局面”。但是此书基本不用日本史料，偶尔使用日本方面的论著如林泰辅《朝鲜通史》，还误以为林为朝鲜人。

（注 15）这一点在历史资料中就已经有差异了。如万历二十四年（日本庆长元年，1596），明朝派正使杨方亨、副使沈惟敬，赴日本大阪见到丰臣秀吉，据日本文献记载，丰臣秀吉曾经提出“七条”苛刻要求。但在明朝记载中，却似乎是日本求和，明朝居高临下，让日本从釜山退兵，不得再侵略朝鲜，册封日本国王之后，再谈互市问题，对照之下，与丰臣秀吉的“七条”差别太大。以上可参考《明神宗实录》、宋应昌《经略复国要编》、诸葛元声《两朝平壤录》等。

（注 16）参看佐藤信等《（改订版）详说日本史研究》（山川出版社，2012），234 页。

（注 17）翦伯赞《中国史纲要》（下），552 页。

© 2017 SGRA

報　告 3

日本の国史（研究／教科書）において語られる東アジア

三谷 博
跡見学園女子大学教授

はじめに

日本における歴史研究と歴史教育は、いずれも日本史と外国史とに二分されている。それはいま生きている日本人の世界観に大きな影響を及ぼしているように見える。すなわち、日本とアジアを含む世界とを別物と見なし、「日本は世界（アジア）の外にある」という世界観である。

筆者は、グローバル化の進む世界でこうした世界観を維持することは不適切と考え、近年、日本学術会議の史学委員会の中で、高等学校の歴史教育の中に日本史と世界史を融合した「歴史基礎」という科目を新設すべきことを提唱してきた。現在、文部科学省はこうした提言を参照しつつ、次の学習指導要領において、類似した枠組の下に「歴史総合」という科目を必修科目として新設することを検討している。

ここでは、現行の日本史教育を取り上げ、それが日本の外界、とくに東アジアをどのように扱っているのかを、主要な教科書を素材として分析し、その内容を確認したい。その上で将来における日本史の研究と教育の理想像を考えるのが課題である。

1．高校教科書における世界と東アジア

日本の高校教育では、日本史と世界史は科目として分断されており、かつその履修者は必ずしも重なっていない。現行の制度では世界史は必修であり、したがって日本史の履修者は世界史をすでに学んでいるはずであるが、実際にはそうでもない。大学受験に力を注いでいる高等学校の中には、世界史を教えていない学校がある。また、国立大学を受験するために必須の大学センター試験では、「歴史地理」に属する3科目の中では、日本史の受験者が最多で、地理が2番手、

© 2017 SGRA

世界史は最も少ない。したがって、現在の高校生の中には世界史を学ばないで、あるいは学んでもすぐ忘れて卒業する者が少なくないのではと懸念される。未来の世代が日本の外部の歴史に無知であることは望ましいことではなく、それが「歴史総合」を設けようという動きの出発点となっている。

では、現在、大学受験者の多くが学んでいる日本史の教科書では、世界と東アジアはどう記述されているのだろうか。はたして、日本史は外界と切断されて書かれているのだろうか。以下では、これを、三つの代表的な教科書に即して分析してみよう。

（1）山川出版社『詳説日本史B』2015年

この教科書は日本で最も売れている教科書で、いま60％を越える市場占有率をもっている。したがって、将来の日本人の歴史観に対する影響力も大きいはずである。

統計の結果を紹介する前に、日本史教科書の時代区分を簡単に説明しておこう。

「原始・古代」「中世」「近世」「近代・現代」という四分法である。教科書であるから文部科学省の規定する「学習指導要領」に従っているわけであるが、学界においてもこの四分法は長く使われてきた。これは、西洋における「古代」「現代」「中世」という三分法に、日本の事情を勘案してもう一つの時代を追加してできたものである。

日本史の「近代・現代」とは、西洋との関係の緊密化により始まった「近代化」の時代である。物理的時間としては、中国での「近代」「古代」の二分法における「近代」と同じ時代を指す。一方、日本史の「古代」とは、言わば日本の「古典文明」が築かれた時代である。３世紀頃における国家の形成から始まり、８世紀における律令国家の確立を頂点とする時代で、中国では魏晋南北朝から唐、韓半島では三国時代から統一新羅にかけての時代に相当する。

この「近代」と「古代」の間には、「中世」と「近世」の二つの時代が挟まれている。この二つは17世紀初頭の徳川政権の確立を目安に区分されている。「中世」後期の戦乱の時代が終り、日本は再統一されて、平和が200年以上も続く「近世」を迎えたという認識である。この教科書もそのような枠組で書かれている。だだし、学界においては、「中世」・「近世」それぞれの、「古代」や「近代」との関連づけは必ずしも安定したものではない。「近世」末期においては、史家たちは「中世」と「近世」とを武家支配の時代として連続的に考えるのが普通で、それは西洋から「封建制」概念が輸入されたとき、「封建制の時代」という名で踏襲された。これに対し、1960年代からは、アメリカの学者の示唆によって「近世」を「中世」と切断し、「近代」の前提が築かれた時代と見なすことが始まった。当時は経済発展のめざましい成果が見え始めた時代で、そのとき、西洋との接触以前に既に「近代化」の萌芽があったという解釈が提示され、人気を博したのである。このような傾向はのちに韓国や中国でも再現されることになる。しかし、日本の教科書に立ち戻って言えば、それらは、こうしたイデオロギー的な歴史解釈に深入りすることはない。現在、立場を越えて共有されている

© 2017 SGRA

上記の時代四分法を基礎に、事実を記すことに留まっている。

さて、『詳説日本史B』は日本の外界の様子、またその日本との関係をどのように記述しているのであろうか。表１・表２は外界との関係を記述した行数を概算したものである。時代区分はこの教科書の章別構成を採用し、日本の外界については、大まかに、全世界、東アジア（インドを含む）、東アジア外（西洋など）の3地域に区分し、その記述量を比較してみた。

表１　山川　地域別の記述行数（図版も行に換算。コラムや註も行単位で勘定）

列１	世界全体	東アジア・インド	東アジア外（含西洋）	総計（A）	頁数（B）
まえがき・特設ページ概況	5	9.5	0	14.5	4
第Ⅰ部　原始・古代	22	300	0	322	79
第Ⅱ部　中世	27	207	4	238	70
第Ⅲ部　近世	18	271	359	648	94
第Ⅳ部　近代・現代	390	669	808	1867	167
総計	462	1456.5	1171	3089.5	414

表２　山川　１頁あたり記述行数（A/B）

列１	世界全体	東アジア・インド	東アジア外（含西洋）	総計
まえがき・特設ページ概況	3.6	2.4	0.0	3.6
第Ⅰ部　原始・古代	4.1	3.8	0.0	4.1
第Ⅱ部　中世	2.8	3.0	0.1	3.4
第Ⅲ部　近世	6.0	2.9	3.8	6.9
第Ⅳ部　近代・現代	2.3	4.0	4.8	10.9
総計	7.0	3.5	2.8	7.5

この教科書での日本の外界に関わる記述は、１頁当りの平均で7.5行である。１頁当りの行数は約29行であるから、約４分の１を世界との関わりの記述に割当てていることになる。日本の外界に関わる記述量は意外に多い。

時代別に１頁当りの記述量を概観すると、外界の記述は「近代・現代」や「原始・古代」に多く、中世に少ない。意外なことに、「鎖国」の時代と見なされてきた近世でかなり詳しく取上げられている。その理由はすぐあとで説明する。

時代ごとにどんなトピックや地域に関心を注いでいるかを紹介すると、まず「原始・古代」では、東アジア全般およびインドとの関係が中国との関連とともに重規されている。原始時代については、考古学的知見に基づくユーラシア東端との連続性とそれからの乖離、国家の形成期については、中国史書の史料としての援用、中国・朝鮮を介する仏教の伝来、さらに中国への使節派遣による律令等の制度・文物の輸入などが主なテーマである。

日本の「中世」は12世紀に武家の政権が成立して京都の古代政権と併立し、やがて地方に武家が割拠するようになった時代である。中国では宋朝から元朝を経て明朝に至る時代、韓半島では高麗から朝鮮初期の時代に相当する。この時代については外界の記述は比較的に少なく、宋朝との貿易と禅文化の輸入、モンゴ

© 2017 SGRA

ルの来襲、およびいわゆる「倭寇」などが主な話題である。倭寇に関してはその後期の構成員の主体が非日本人だったことが明記されている。また、この時代では、後に「日本」に組込まれることになる周辺部、琉球王国の形成や蝦夷地・樺太に住む諸民族の動きも記述される。

日本史上の「近世」は、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の3人の覇者によって築かれたというのが定説であるが、教科書もこれを踏襲している。その一方、一般に「鎖国」の時代と見なされてきたにもかかわらず、この教科書は外界の記述に1頁当り平均7行も割当てている。しかも、その参照している地域は東アジアより東アジアの外部が多い。その原因は、表3に見えるように、近世を扱う第Ⅲ部のうち、最初と最後の章で西洋との関係が詳述されていることによる。16～17世紀の章ではキリシタンについて多くの記述があり、19世紀前半の章では西

表3　山川　時代別・地域別の記述行数

列 1	全世界	東アジア / インド	朝鮮	中国	台湾	東南アジア	琉球
まえがき	5						
特設ページ（大仏造立）		6	3.5				
第Ⅰ部　原始・古代	22						
1章　日本文化のあけぼの		92	3	27			
2章　律令国家の形成		68	22	88			
3章　貴族政治と国風文化							
小計	22	160	25	115	0	0	0
第Ⅱ部　中世	27						
4章　中世社会の形成		23		18			7
5章　武家社会の成長		30	20	76			7
小計	27	53	20	94	0	0	14
第Ⅲ部　近世	18	4					
6章　幕藩体制の成立		40	76	15		14	12
7章　幕藩体制の展開		9	8	39	2		
8章　幕藩体制の動揺				40			
小計	18	53	84	94	2	14	12
第Ⅳ部　近代・現代	28						
9章　近代国家の成立		24	106	109	11		15
10章　二つの世界大戦とアジア	178		26	207		34	
11章　占領下の日本	93		20	4		12	
12章　高度成長の時代	38	4	12	3		5	14
13章　激動する世界と日本	36	14		15		9	
小計	373	42	164	338	11	60	29
総計	445	314	296.5	641	13	74	55

© 2017 SGRA

洋に対する海防問題と洋学の普及に数多くの行を割いている。これに対し、真ん中の18世紀の章では外界に関する記述が少ない。外交関係のあった朝鮮、および漢学への言及を除き、ここでは伝統的な「鎖国」のイメージを確認することができる。

さて、「近代・現代」であるが、19世紀半ばの西洋に対する開国および明治維新から現在までをカバーする。名称上は「近代」と「現代」と両方を使っているが、五つの章をそのいずれかに分類しているわけではない。これは、「近代」と「現代」の区分が時代とともに変化し、いまだに定説がないと執筆者たちが考えたからであろう。学界では、戦後にはロシア革命が境目とされ、次いで大日本帝国の崩壊が境界とされたが、現在は1960年代の高度成長期、さらに冷戦の終りを目安とする見方も提出されている。

蝦夷地・樺太	東アジア小計	中東	ヨーロッパ	ロシア	アメリカ	その他	東アジア外小計	世界総計
	0						0	5
	9.5						0	9.5
	0						0	22
	122						0	122
	178						0	178
	0						0	0
0	300	0	0	0	0	0	0	322
	0						0	27
9	57						0	57
17	150		4				4	154
26	207	0	4	0	0	0	4	238
	4						0	22
12	169		201				201	370
	58						0	58
	40		118	40			158	198
12	271	0	319	40	0	0	359	648
	0						0	28
10	275		253	52	57		362	637
	267		89	33	113		235	680
	36				101		101	230
	38			7	38		45	121
	38	35		18	12		65	139
10	654	35	342	110	321	0	808	1835
48	1441.5	35	665	150	321	0	1171	3057.5

© 2017 SGRA

「近代・現代」における日本の外界の記述は平均11行であり、１頁の38％も割り当てている勘定になる。全世界・東アジア・東アジア外の3区分の中では東アジアの外部が最も多い。

しかしながら、興味深いのは、章ごとにこれらの比重が異なる点である。表３によると、最初の「近代国家の成立」の章では、全世界の記述がなく、東アジアの外部が東アジアを上回る。これは、日本の近代がアメリカによる開国要求から始まり、かつ明治維新における改革が主に西洋化により行われたと認識されているためである。その東アジアの外部の中では、ヨーロッパの記述がアメリカやロシアを凌いでいることも興味深い。他方、個別の国への言及では朝鮮と中国が最も多い。中国への言及は東アジア全体の国際環境を説明するときになされることが多く、国家間の関係としては朝鮮との関係の記述が最多である。これは、朝鮮との国交更新から韓国併合に至るまで、朝鮮との関係が当時の日本外交の最も緊切な課題だったからであろう。次の章は「二つの世界大戦と東アジア」と題されている。表題どおり、東アジアとの関係の記述が東アジア外の1.4倍に上る。個別の国の記述で中国との関係が圧倒的な比重を占めるように、日中戦争に至る過程が重視されているためである。ただし、以前の章と比べると、全世界の記述が急増している点が目を引く。これは第１次世界大戦のヴェルサイユ講和会議をはじめ、日本が各種の世界規模の条約機構に参加したことから来ている。いわば日本が「列強」の一員となったことが、このような形で表現されているのである。ただし、この教科書が大国化を誇るような記述をしているわけではない。東アジアの外部を見ると、ヨーロッパに代ってアメリカが首位になった。これは日米戦争だけでなく、アメリカが第１次世界大戦後に世界政治の主要プレーヤーとして登場したことを反映していると思われる。

第２次世界大戦直後の「占領下の日本」では占領軍の主力だったアメリカの記述が他を圧倒する。その一方では、日本から独立した韓国・朝鮮や中国への言及は少ない。占領下にあって両国との外交がなく、朝鮮戦争に伴う特需を除いて経済関係も乏しかったためであろう。次は「高度成長の時代」であるが、ここでも同様の傾向が、韓国・中国との国交回復の記述を例外として、続いている。他に興味深いのは、ヨーロッパが「全世界」の記述以外に登場しなくなったことである。最後の「激動する世界と日本」では、他の章と異なって、関係の記述より地域ごとの状況説明が多い。その中では中国への言及が比較的に多く、中東が初めて登場している。

以上、世界の中でどの地域に注目しているかを通観してみた。東アジアの扱いに絞ってまとめ直すと、原始・古代および中世では当然ながら東アジアがほとんど全てであるが、近世以降では東アジアの外部が登場し、しかも東アジアの記述より多いという意外な特徴が見られた。東アジアの内部構成に目を向けると、原始・古代ではインドを含むアジア全体および中国への言及が圧倒的に多い。これに比べると、朝鮮への言及は、東アジア全体の概況説明の中で言及されることがあるとはいえ、時代を通じて意外に少ないと言えるだろう。

次に、日本との関係でどんな分野に着目して外界を記述しているかも、見ておこう。表４―a・bによると、原始・古代では文化移転が半数以上を占める。文

© 2017 SGRA

物・制度すべてを中国・インド・朝鮮から輸入したことによるのは言うまでもない。古代初期の王権は朝鮮半島に侵攻するほどに強力であったにもかかわらず、無文字社会であった。したがって、考古学的調査に加えて中国王朝の正史が史料として援用される。中世においては、古代では不可分だった国家の外交と貿易が分離され、貿易が外交と別に展開したことへの言及が特徴的である。戦争を含む外交の記述はどの時代でも多く、とくに近代・現代では約４分の３を占めるに至っている。「鎖国」の時代と目されてきた近世でも半分以上になっているのは、先に述べた事情による。戦争だけを取り出してみると、全体では５分の１を占める。そのほとんどは中世の蒙古来襲と近代・現代の諸戦争であり、原始・古代や近世では極めて少ない。日本の外界との関わりが時代ごとにかなり異なる相貌を見せたことが、このような形で示されていると言ってよいだろう。

表 4-a　山川　分野別の記述行数

列 1	史料	文化移転	交易	外交・戦争	戦争（内数）	総計
第Ⅰ部　原始・古代	60	211	18	51	14	340
第Ⅱ部　中世	4	37	58	79	40	178
第Ⅲ部　近世		192	78	308	24	578
第Ⅳ部　近代・現代		218	305	1417	503	1940
総計	64	667.5	459	1855	581	3036

表 4-b　山川　分野別の記述行数（%）

列 1	史料	文化移転	交易	外交・戦争	戦争（内数）	全体
第Ⅰ部　原始・古代	18%	62%	5%	15%	4%	100%
第Ⅱ部　中世	2%	21%	33%	44%	22%	100%
第Ⅲ部　近世	0%	33%	13%	53%	4%	100%
第Ⅳ部　近代・現代	0%	11%	16%	73%	26%	100%
総計	2%	22%	15%	61%	19%	100%

（２）他の歴史教科書：東京書籍と清水書院

次に他社の教科書も比較のために瞥見する。一つは、市場で2番目の占有率をもつ東京書籍の『新選　日本史B』2014年版（以下東書）、他は清水書院の『高等学校　日本史B』2016年版（以下清水）である。

この2者の章別構成は山川とあまり変らない。いずれも文科省の学習指導要領に従っているからであるが、細かい点の構成は異なる。目立つのは山川版で一緒にされている「近代」と「現代」を1945年を境目に区別している点である。とはいえ、山川版でも帝国の時代とその崩壊後の時代とははっきり区別されているから、内容的に大差はない。現在までの日本では、第2次世界大戦の「戦前」と「戦後」の時代区分が重視されてきており、それが教科書でも踏襲されているわけである。2016年の時点で「戦前」も「戦後」もおよそ70年余、ほぼ同じ長さを持つようになっている。

© 2017 SGRA

さて、これら3種の教科書の間には、外界と東アジアの扱いにおいて、どのような違いが認められるだろうか。以下では、山川版で意外な事実が見つかった「近世」に絞って検討しよう。表5―a・b・cを対照すると、まず近世全体について見れば、東書の外界への言及が山川より少なく、逆に清水に多いことが分る。少なめの東書でも1頁当り6行を超えているから、山川で発見した「鎖国」という通念に反する傾向は他の教科書にも共有されていることが分かる。

表5－a　山川　近世の地域別比重

列1	全世界	東アジア	東アジア外	世界総計
第Ⅲ部　近世	82%	18%	0%	100%
6章　幕藩体制の成立	0%	46%	54%	100%
7章　幕藩体制の展開	0%	100%	0%	100%
8章　幕藩体制の動揺	0%	20%	80%	100%
小計	3%	42%	55%	100%

表5－b　東書　近世の地域別比重

第3章　近世社会の形成と庶民文化の展開	全世界	東アジア	東アジア外	世界総計
1章　ヨーロッパ文化との接触と国内統一	27%	26%	47%	100%
2章　幕藩体制の成立	0%	41%	59%	100%
3章　近世社会の発達と町人文化	16%	84%	0%	100%
4章　幕藩体制の動揺と庶民文化の発達	0%	8%	92%	100%
小計	11%	36%	53%	100%

表5－c　清水　近世の地域別比重

第3編　近世	全世界	東アジア	東アジア外	世界総計
1章　中世から近世社会へ	11%	55%	34%	100%
2章　幕藩体制の成立と国際関係	0%	71%	29%	100%
3章　幕藩体制の展開と元禄文化	16%	84%	0%	100%
4章　幕藩体制の動揺と化政文化	6%	15%	78%	100%
小計	6%	62%	32%	100%

これに対し、地域バランスを見ると、山川版と東書版で東アジア外部の記述量が東アジア内部を上回るのに対し、清水版では逆に東アジアがその外部をかなり上回る。表6―a・b・cの1頁当りの行数を見ても同じ傾向が確認できる。同じ学習指導要領の下でも、教科書によってかなり異なった歴史解釈がされているのである。

表6－a　山川　近世の1頁当り地域別行数

列1	全世界	東アジア	東アジア外	世界総計
第Ⅲ部　近世	18.0	4.0	0.0	22.0
6章　幕藩体制の成立	0.0	3.9	4.7	8.6
7章　幕藩体制の展開	0.0	3.9	0.0	3.9
8章　幕藩体制の動揺	0.0	1.0	3.8	4.7
小計	0.2	2.7	3.6	6.4

表6－b　東書　近世の1頁当り地域別行数

第3章　近世社会の形成と庶民文化の展開	全世界	東アジア	東アジア外	世界総計
1章　ヨーロッパ文化との接触と国内統一	4.6	4.4	8.0	17.0
2章　幕藩体制の成立	0.0	3.4	4.9	8.3
3章　近世社会の発達と町人文化	0.3	1.6	0.0	1.9
4章　幕藩体制の動揺と庶民文化の発達	0.0	0.5	5.2	5.7
小計	0.7	2.2	3.2	6.1

© 2017 SGRA

表６－ｃ　清水　近世の１頁当り地域別行数

第３編　近世	全世界	東アジア	東アジア外	世界総計
１章　中世から近世社会へ	2.1	10.3	6.3	18.6
２章　幕藩体制の成立と国際関係	0.0	11.9	4.8	16.7
３章　幕藩体制の展開と元禄文化	0.2	1.2	0.0	1.5
４章　幕藩体制の動揺と化政文化	0.4	1.1	5.4	6.9
小計	0.5	5.1	2.6	8.2

この由来は恐らく著者の違いから来ている。清水版の近世は、中世末期から近世初期の国際関係史の専門家、荒野泰典によって主に書かれたものと思われる。荒野はこの分野の解釈変更に1980年代から力を注いできた最も有力な研究者であった（注1）。「戦後」日本における近世初期の国際関係の研究はもっぱらキリシタンをはじめとする西洋との関係に注目し、西洋に対する「鎖国」を強調してきた。これに対し、彼はむしろ近隣の朝鮮・中国・琉球・蝦夷地・東南アジアなどとの関係に注目し、キリシタン追放の後にもこれらとの関係が維持された事実を実証的に示し、「鎖国」に代えて、「海禁」という漢語を日本を含む東アジア共通の国際関係の文法として使うように提唱した。日本の学界は今日、最後の点はともかくとして、彼とその共同研究者が提唱した近世日本の「四つの口」という解釈を通説として承認するようになっている。

清水版は荒野の解釈を十二分に盛ったものである。筆者はこの近世初頭の東アジアと東アジア外とのバランス配分は妥当と判断する。山川や東書の近世初期の扱いは、「戦後」のアメリカによる占領時に形成された西洋の圧倒的イメージを引きずったもののようで、今日の学界の常識から見ると時代遅れではないかと思われる。とはいえ、清水版における国際関係の記述は国内の記述とのバランスからみるといささか過剰かもしれない。他方、近世の中期や後期に注目すると、3社の傾向は似ている。中期においては、漢学の普及を例外として、外界の記述が少なくなり、ヨーロッパへの言及は皆無となる。このような扱いは歴史の実際を反映していると見て良いだろう。しかし、今日の学界の最先端では、漢学の普及が後の明治維新の重要な前提条件となったことが注目されているので、いずれ若干の改訂が必要となることであろう。他方、18世紀末以降については、3者共通して、西洋の記述が増え、東アジアが減る。これも明治維新との関係、とくに維新後に急激な西洋化が行われた事実を考えると、妥当な判断と思われる。

いま「近世」以外については定量的な分析が行えないが、通読した印象では、3社の教科書は近世と同様な傾向を持つようにみえる。東書が主に国内に関心を注ぐのに対し、清水は特設記事として、東アジア・北海道・満州移民・沖縄など境界地域の「地域史」を、「女性の社会史」と並んで設けており、山川以上に日本の外界およびそれとの関わりに深い関心を注いでいるように見える。

© 2017 SGRA

2.日本史の研究動向

日本の高校用歴史教科書は主に大学の教員によって執筆される。中等教育の教科書にアカデミズムのメンバーが関わりをもたない中国や、中等教育の教員が深く関与する韓国とはかなり異なっている。また、教科書の執筆者と政府との関係も両国とは異なっている。学習指導要領という大枠は守らねばならないが、具体的な中身については、清水について見たように、かなりの自由度がある。

これは教科書の内容が学界での研究動向にかなり左右されていることを意味する。「国史」にもかかわらず、外界の記述がかなりの比重を持つこともそのせいである。山川の序文には次の文言がある。「日本史は、私たちの住む日本列島の中での人々の歩みを探るものであるが、その歩みはさまざまな地域との交流の中で、その影響を受けつつ展開してきたものである。したがって私たちは日本史を学ぶ場合、いつの時代についても、周辺の国々をはじめとする各地域の歴史や日本と諸外国との関係に目を向けていく必要がある」。

日本史を世界、とくに近隣との関係の中で再定位することは、この数十年の日本史学界の流行であった。ただ、古代史の場合、これは古くからの伝統であった。律令の輸入が古代国家の骨格を作り、かつ原本が失われた唐令が日本律令の注釈書から復元されたことからも明らかである。しかし、中世や近世についてこれを始めたのは筆者と同世代の学者、先の荒野泰典や村井章介らであった。村井は中世後期の専門家であり、いわゆる「倭寇」が日本・朝鮮・明といった諸国をまたいで暮らしていた海民集団であったことを明らかとし、当時の東アジアに国家とは別の秩序原理もあったことを示した(注2)。また、19世紀半ばの日本史の専門家である筆者は、近世から19世紀末の東アジア全体を取り扱った大学レベルの教科書『大人のための近現代史　19世紀編』（東京大学出版会、2009年）を編集した。日本・朝鮮・清朝・琉球の伝統社会がロシア・イギリス・アメリカの登場とともにどう変化したか、また、その相互関係がどう推移したかを述べた書であるが、従来の近代史における国際関係の記述が日本内部からの視点のみで書かれてきたことに対し、朝鮮や中国など、外部からの視点も同時に理解できるように構成したことが新しい点である。

このように、過去数十年における日本史学界では、いわば「東アジアの発見」というべき流行が生まれ、従来の「孤立した国日本」というイメージを崩していった。それが高校レベルの日本史教科書にも反映されてきたのである。

しかしながら、この方面の研究が十分かというとそうではない。とくに、近代に関しては、帝国時代の日本領・植民地、沖縄や北海道をはじめとする境界領域、およびこれらの間を移動した人々の実証研究は始ったばかりであり、筆者の次の世代が積極的に取り組んでいる（例えば、塩出浩之『越境者の政治史　アジア太平洋地域における日本人の移民と植民』名古屋大学出版会、2015年など）。それらが蓄積されるならば、いずれより広い視野に立つ日本通史も可能となることだろう。

© 2017 SGRA

むすび

現在、日本史の研究と教育は、その外界との関わりをどう位置づけるかという点で岐路に立っている。学界では、中世や近世の研究においては、近代のそれと異なって、流行が下火になりつつあるように見える。他方、つい最近に生じた隣国、中国や韓国との関係悪化は、東アジアの中に日本を位置づけるという研究動向に冷水を注いだ。若い世代が「内向き」になり、国内や西洋との関係のみに注目する以前の態度に退行する可能性もなくはない。

教育の世界では、高校の新設科目「歴史総合」が成功するか否かが重要である。文部科学省は、次世代がグローバル化の中で生き抜けるよう、近現代に絞って日本史と世界史を融合しようという枠組みでこの科目を設計しつつあるが、これに学界や教育界が協力するか否かは明らかでない。また、グローバル化と言っても、東アジアと欧米の間のバランスをどう取るかも明らかでない。内外から押し寄せる政治圧力を超えて、長期的に有意味な解が得られるか否か、予断を許さないというのが現在の状況である。

〈注釈〉

（注１）代表作は、荒野泰典『近世日本と東アジア』東京大学出版会、1988 年。荒野泰典，石井正敏，村井章介編『地球的世界の成立　日本の対外関係５』吉川弘文館、2013 年。

（注２）村井章介『アジアのなかの中世日本』校倉書房、1988 年。同『中世倭人伝』岩波書店、1993 年。

© 2017 SGRA

討　論 1

国民国家と近代東アジア

八百啓介
北九州市立大学教授

はじめに

北九州市立大学、地元の大学の文学部の八百啓介と申します。今回、彭先生にお声を掛けていただき、このような貴重な機会に参加させていただきました。ありがとうございます。

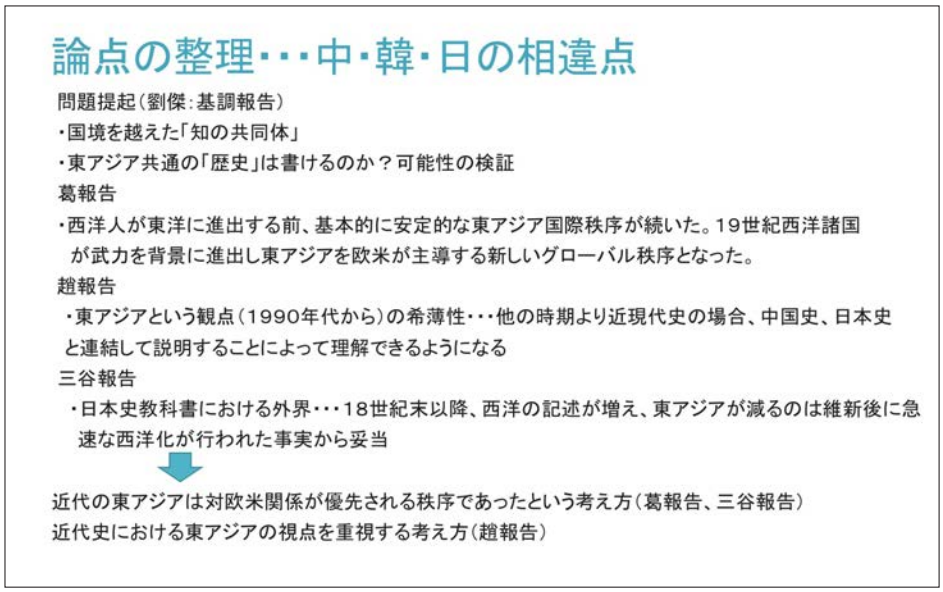
私の専門は必ずしも東アジアではないのですが、ここ数年、21世紀の東アジアの若い人たちの未来を私たちが縛っているのではないか、大学の現場で中国、韓国との交流を深める必要があると考えて、特に今、韓国の仁川の博物館とのプロジェクトを進めています。

1. 国民国家以前の東アジア

今日、劉先生の問題提起と、特に葛先生、趙先生、三谷先生お三方のご報告を伺っていると、近代をどう捉えるかについて、中国、日本、韓国で微妙な違いがあるような気がしました（スライド1）。中国の場合はアヘン戦争、日本の場合はアヘン戦争からさらにペリーの来航というインパクトがあって、先ほど三谷先生が教科書の事例を出してお話しされていましたが、どうしても近代というのは欧米との関係を中心に考えざるを得ないのではないか。それに対して、趙先生のお話では、韓国は事情が少し違う、つまりアヘン戦争やペリーの来航を直接体験していないということで、三カ国の違い、この点では日本・中国と韓国との違いが出てきているような感じを受けました。ただ、私個人としては、趙先生のように、日本の教科書も東アジアを中心にもう少し考え直すべきではないかと考えています。

© 2017 SGRA

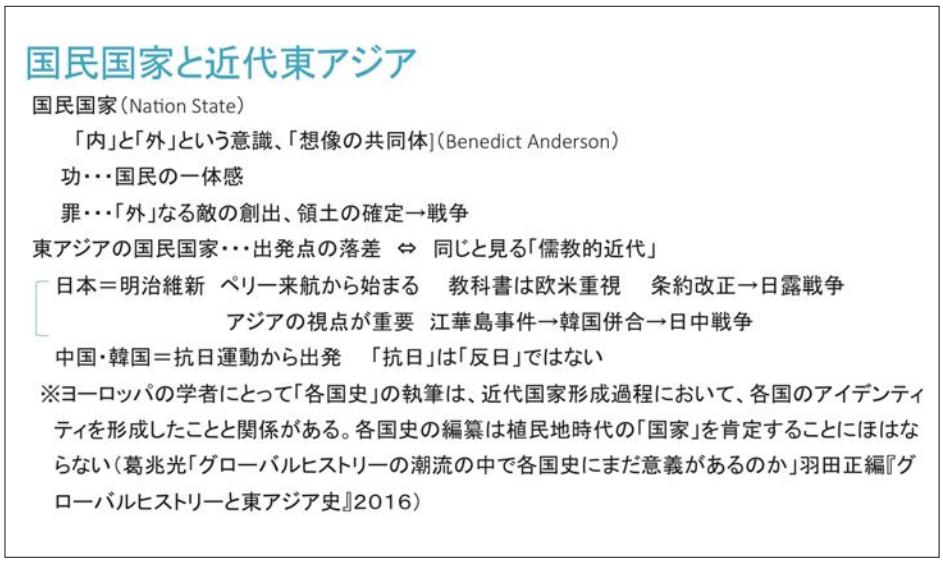
スライド１



私は専門領域が日本の近世、江戸時代の対外関係です。近世を研究している立場から申しますと、本当に近代になって良かったのかという疑問があります。近代は言葉を変えると国民国家（nation state）と言ってもいいと思うのですが、国民国家は確かに国民の一体感をつくるという意味ではメリットがありますが、国民国家をつくることによって外の敵をつくるという問題を孕んでいます（スライド２）。

さらに東アジアの国民国家を考えると、今度は日本に対して中国、韓国との間に大きな出発点の違いがあります。日本はペリー来航、明治維新から始まり、当然教科書はそれを重視します。それに対して、現在の中華人民共和国、大韓民国は抗日運動から出発しています。私たち日本人は「抗日」と「反日」を正確に区別できていません。これを区別するところから出発しなくてはいけないのです。今日の中国、韓国の国家は抗日運動からスタートしたということをきちんと認識する必要があると思います。

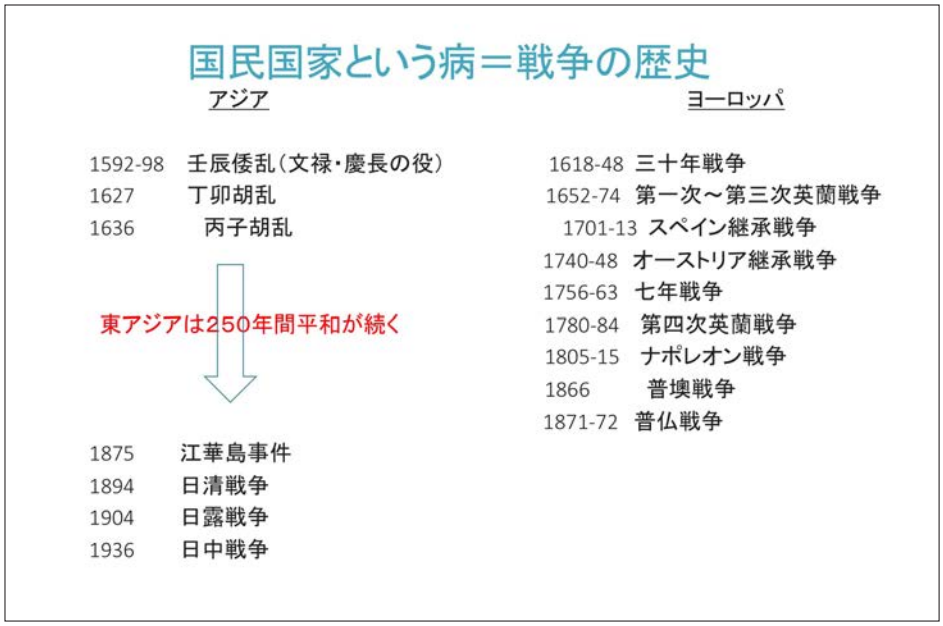
スライド２



© 2017 SGRA

しかしながら、この国民国家というものが果たしてどこまで有効なのかということがあります。これも先ほど、葛先生のお話にも、三谷先生のお話にもありましたが、実は江戸時代は非常に平和な時代なのです。近代以降の日本では、江戸時代とは鎖国で閉ざされた停滞の時代だとネガティブに評価しているのですが、私はもっとポジティブに評価していいと思うのです。江戸時代、ヨーロッパは戦争に次ぐ戦争でした。欧米においては国民国家を形成するために戦争に明け暮れていました。ところが東アジアは国民国家というものを導入するまでは、非常に平和な時代が続いていたのです（スライド３）。まずこのことを今回のフォーラムで共有できたのではないかと思うのですが、これをもっと一般の人々に共有してもらいたいと思っています。これは決して停滞ではなく、東アジアの英知、智恵だったのです。私たちは研究者として、この智恵をもう一度学び直し、研究し直し、一般の人々に伝える義務があるのではないでしょうか。

スライド３

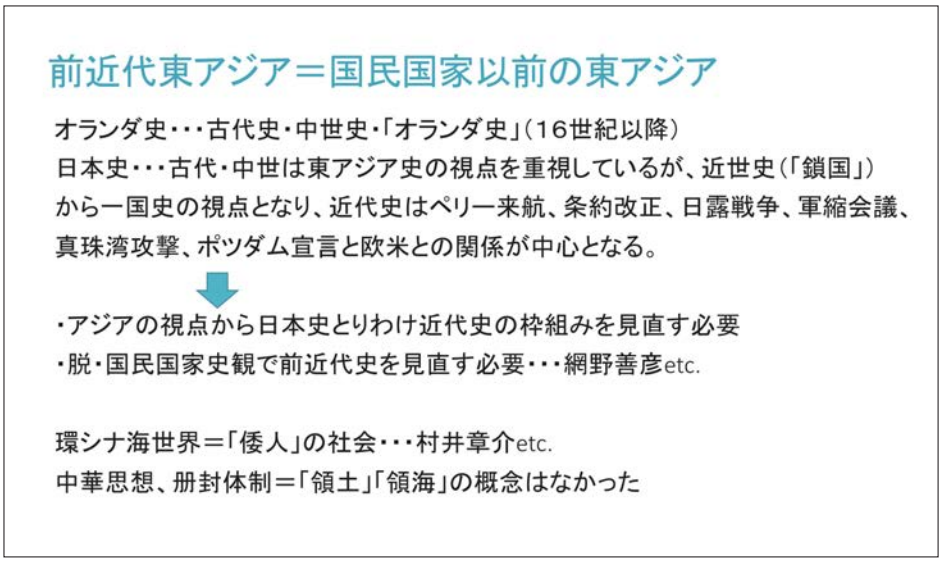


２．東アジアからの見直し

私は江戸時代の特にオランダとの関係を中心に研究しています。オランダの場合もオランダ史はありますが、16世紀から始まるのです（スライド４）。オランダという近代国家が登場するのが16世紀で、それ以前の時代は古代史・中世史というように、日本で言うと東アジア史に相当するのでしょうか、ヨーロッパ全般のローカルヒストリーとして学ぶのです。日本史でも、古代・中世は特に東アジアの視点で語られていたのですが、近世史から一国史の視点になっています。私たちはより明確に東アジアの視点を取り入れる必要があるのではないかと思います。

© 2017 SGRA

スライド４

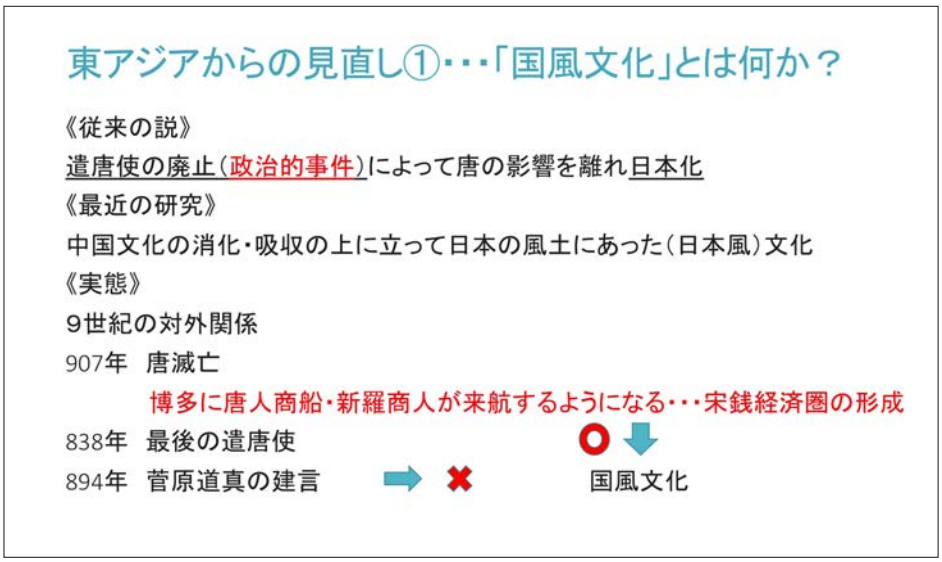


（１）国風文化とは何か

劉先生が最初の基調報告で、対話の必要性を主張され、消えかけた火を何とかしてともさなくてはいけないとお話しされていましたが、そのためには、東アジアという視点で考えればこういうことが分かるのだというメリットをより一般の人々にアピールする必要があるのではないでしょうか。ここで問題になるのは、私たちの歴史の中で、東アジアの何を取り上げれば何が分かるのかということです。これをきちんと伝えることによって、東アジアという認識がより多くの人々に共有されるのではないかと思っています。

例えば、国風文化というものが日本の歴史の教科書に載っています。従来は遣唐使が廃止されて中国との関係が切れたので独自の文化が生まれたという説明がなされてきましたが、最近の研究ではそうではないといわれています（スライド５）。確かに遣唐使という政治的な関係、外交関係は切れるのですが、中国から大量の船がやってきて貿易が発展したのです。これは宋銭の経済圏が次第に形成

スライド５



© 2017 SGRA

されていく過程です。このあたりは橋本先生のご専門と思います。つまり、日本と中国との経済交流が活性化して遣唐使の必要がなくなり、その上に実は国風文化というものが生まれたのです。経済という視点を取り入れることによって、国風文化の見方が全く変わってきます。そのように、私たちの日本史、東アジアの歴史のさまざまなものを別の視点から見ていくのです。

（2）壬辰倭乱の意味

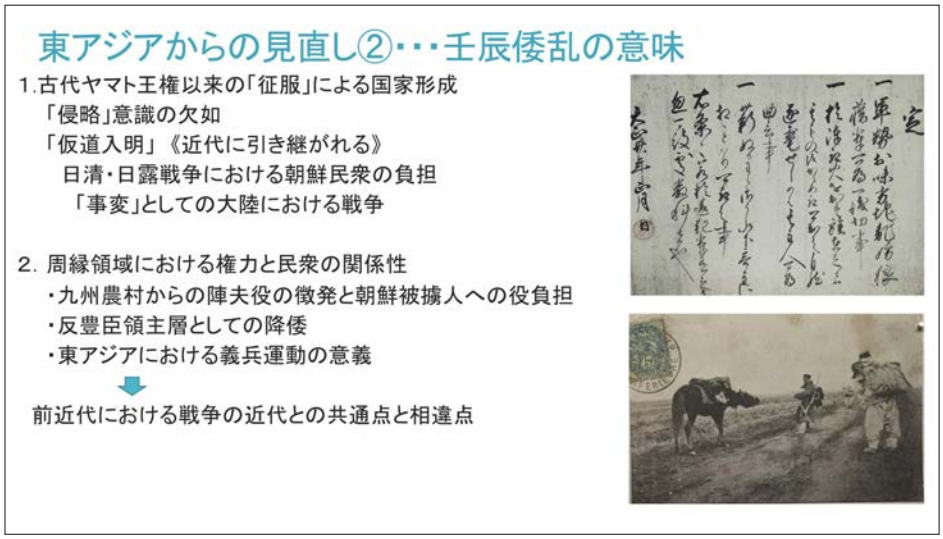
例えば趙先生のお話にもあった壬辰倭乱も、これは豊臣秀吉の命令だったのですが、秀吉は朝鮮において日本の軍隊が乱暴しなければ、朝鮮の民衆が自分を支持してくれると考えていました。ところがそうではなかった。つまり、対外侵略を行っているという認識が彼にはなかったのです。

先ほど三谷先生が、日本の国民性を再検討することの必要性をおっしゃいましたが、日本の国家の本質（nature of nation）ということを考えると、国民国家としては明治維新、ペリー来航からスタートしているのですが、さらに古代にさかのぼると、ヤマト王権の征服事業から実は出発しています（スライド6）。ですから、今日の日本の国家システムは、国民国家としてのペリー来航からの対米重視の性質と、古代ヤマト王権以来の周辺異民族を征服し、同化してきたプロセスの二つを抱えているのではないかと思います。

秀吉の壬辰倭乱、朝鮮侵略戦争が非常に興味深い点は、一つはそういった侵略意識の欠如が近代に引き継がれることです。スライド右下の重い荷物を背負っている朝鮮の人々の写真は、日露戦争とは何だったのかを象徴的に表している写真です。ここには司馬遼太郎が描く日露戦争とは全く別の姿があります。つまり、朝鮮の民衆の負担によって日本はロシアと戦争していたという別の真実がここに見えてくるのです。

もう一つ、壬辰倭乱では九州の農民が荷物を運ぶために朝鮮半島に連れていかれました。そうすると、九州の農村の労働力が不足します。そのために朝鮮の人々を拉致してきて、その人々を農村で働かせました。これは太平洋戦争中に行われた、徴用工や慰安婦などの近代の問題にもつながってくるのです。そういう

スライド6



© 2017 SGRA

意味で私は、一言で言うならば、この壬辰倭乱はまだ終わっていないのではないかという気がしています。また、降倭（ハンウェ）と呼ばれる朝鮮側に付いた日本の武士たちは反豊臣領主層という性格を持っており、つまり、この前近代の戦争を今日の近代の国民国家の戦争というふうに考えるのはかなり無理があります。

それは先ほど趙先生がおっしゃっていた高句麗あるいは朝鮮通信使の問題もそうだと思います。江戸時代の外交関係を、例えば朝鮮通信使や竹島（独島）の問題もそうなのですが、日本と朝鮮、あるいは幕府と朝鮮という国家間の関係で考えるのではなく、例えば朝鮮通信使であれば、幕府と対馬藩と朝鮮という3者の関係において考えなければいけないのです。幕府は朝鮮通信使の必要性をそれほど考えておらず、朝鮮通信使を一番必要としたのは対馬藩でした。従って、前近代の歴史を国民国家の今日の視点で見ることには限界があるのです。逆に国民国家というものが私たち東アジアの人間にとって一体どういう意味があるのかということを問い直す上で、東アジアの視点からもう一度私たちのこの三つの国々の歴史を解き明かすことが重要ではないかと思います。

以上、大変急ぎ足になりましたが、意見を述べさせていただきました。ありがとうございました。

© 2017 SGRA

討　論 2

歴史認識と個別実証の関係
―「蕃国接詔図」を例に―

橋本 雄
北海道大学大学院文学研究科准教授

はじめに

北海道大学の橋本雄と申します。このような大変勉強になる場にお招きいただきましてありがとうございました。渥美財団、北九州市立大学をはじめ、関係各位に敬意を表します。

「国史たちの対話」ということで、いかに対話を進めるべきかということがこれからの具体的な段取りになるのだとお話を伺って思いました。先ほどの三人の先生のご報告は、エスノセントリズムやナショナリズムを相対化するということで共通していて、そういう意味で非常に重要な視点だと思っています。

ただ、ここで問題になっている「国史」というものが一体何であるのかということが重要です。つまり、国史というのは語りの部分、歴史認識、歴史観の部分なのか、それとも個別の実証的な事実・現象といった年表的なものなのかが問題になると思っています。ただ、この二つは截然（せつぜん）と分け難いものがあります。歴史認識があって、その観点から実証研究を行い、個別事実を突き止めることもありますし、個別事実から歴史認識が改まったり、ひっくり返ったりすることもあります。この歴史認識と個別実証はサイクルのように循環し合って、影響し合うことがあると思うのです。

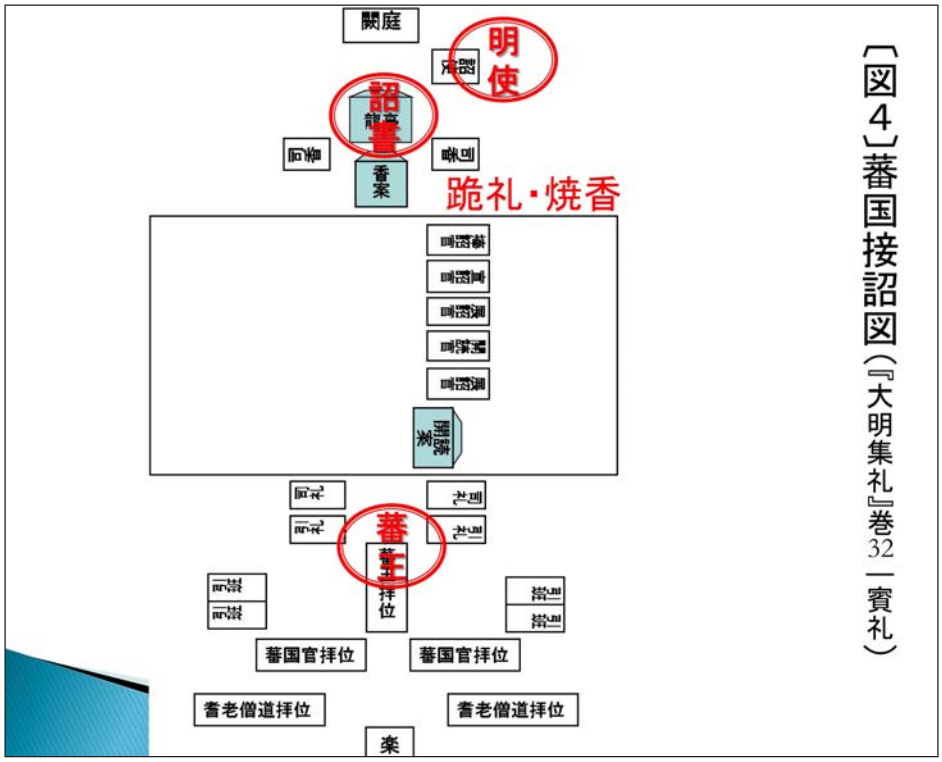
そういったときに、歴史認識問題というと、たいてい領土や慰安婦が問題になりますが、そういう現在のアクチュアルな問題だけではなく、例えば私が勉強している15～16世紀の日本と東アジアとの関係でも、歴史認識と個別実証の関係を考えるのに非常に重要ではないかということで、一つ例を挙げてみたいと思います。

© 2017 SGRA

1．中国側の考える明使に接する蕃国王の作法

ここに示したのは、明の外交儀礼を記したマニュアル『大明集礼』の蕃国接詔図です（スライド１）。これは明が外交使節を日本、朝鮮、琉球、安南などの各国、蕃国に遣わして、詔書や勅書や公命を持っていくのですが、その国書、外交文書をどうやって受け取るかを視覚化した図です。この蕃国接詔図には蕃国接詔儀式の儀という文章が付いています。あるいは迎詔というものがあるのですが、それにちょっと動きを付けるとこんな感じになります。

スライド１



まず、これは詔書にしていますが、国書があって、明の使いがいます。これはお分かりかと思いますが、上が北で、下が南です。ですから、明の使いが蕃王に対して北立南面している形です。詔書が南面しているわけです。ここで蕃王が詔書の前に行ってお香を焚きます。そこでひざまずいて跪礼をします。元の位置に蕃王が戻ります。詔書は捧詔官という詔書を運ぶ役の官吏によってテーブルの上に置かれます。テーブルでまた別の人が詔書を開いて、また別の人が読んでということをやっていきます。物々しいですね。こういうことをやっている間、ずっと蕃王はひざまずいて額を地に付けて、お辞儀をしています。

宣詔（読み上げ）が終わると、詔書はまた元の場所、龍亭という入れ物に戻されます。詔書が全部読み終わったところで、まず蕃王はうつむいて、それから五拝礼、三舞踏、万歳三唱、「万歳万歳万々歳」と言ってこの儀式はおおむね終わります。これが中国側の考えていた明使に接する蕃国王のやり方だったのです。

© 2017 SGRA

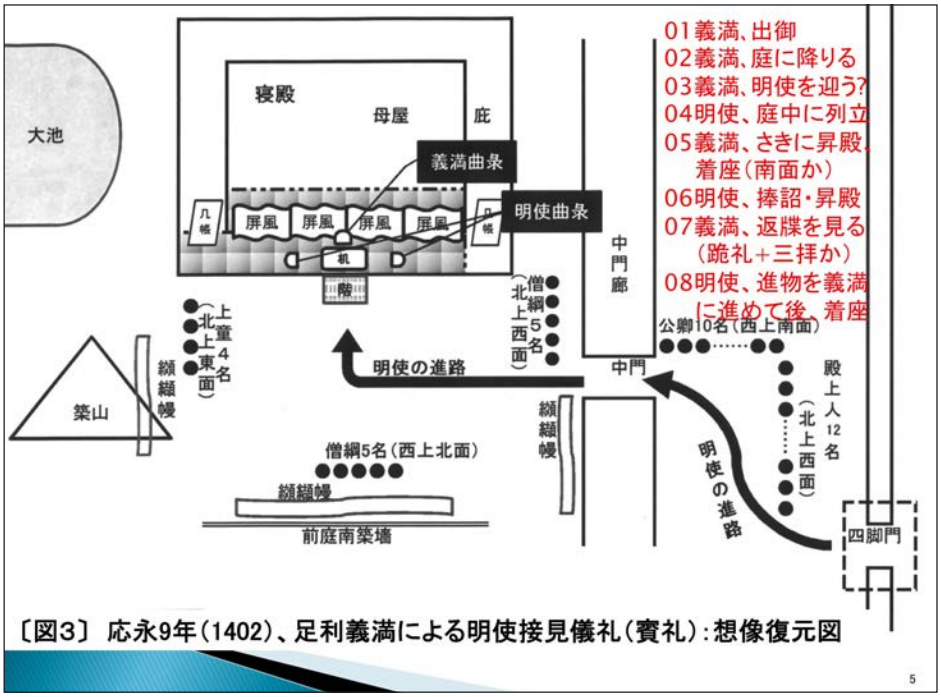
2．足利義満が行った作法の読み替え

これが知らぬうちにわれわれ日本人、日本の学者、研究者にも滑り込んできました。この『大明集礼』蕃国接詔図をみんなが見ていたとは思わないのですが、例えば足利義満が中国の洪武帝なり永楽帝から冊封されたときに行われた儀式は、今までの日本史研究者たちは――中国史の研究者もそうかもしれませんが――、義満が南にいて、明の使いや国書が北にあるという構図で理解して、義満は明の皇帝にへりくだっていたのだ、国書に拝謁したのだといわれていました。これは要するに冊封・朝貢関係から考えれば全くまっとうな理解なのです。しかしながら、実際の現場、外交の現場はどうだったのかというと、これは日本側に実は史料が残っていました。

それを解析するとこういう図になります（スライド２）。まず、義満は先に庭に下りて、外の門まで明の使いを迎えに行きます。そして、明使を伴って庭に連れてきた後に、自分はさっさといすに座って南を向きます。その後、明の使いが詔（みことのり）、皇帝の国書を捧げて昇殿します。義満はその国書を見ます。その後、明の使いは、正使と副使の２人で来ていますから、多分、副使の方が回賜品、日本では進物、つまり進上品と読み替えていますが、それを渡して、義満が受け取るということになっています。

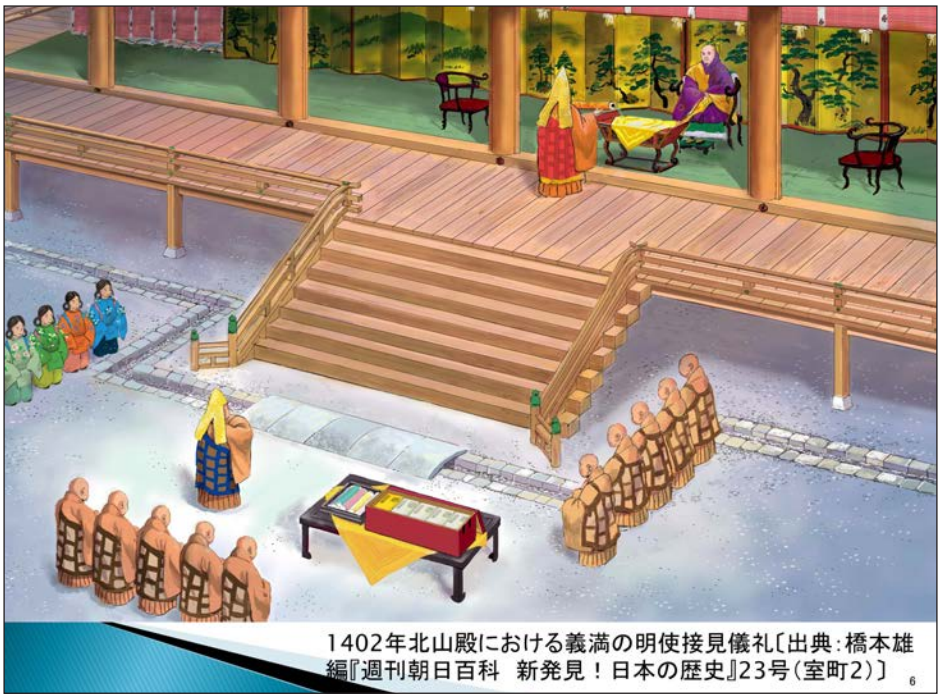
これをさらにイラストレーターの板垣真誠さんに絵にしてもらいました（スライド３）。義満は北座南面して、明使がうやうやしく国書を奉呈しているという形です。ですから、とても興味深いことに、冊封・朝貢体制を受け入れた義満であっても、ちゃんと国内では読み替えているということです。つまり自分が世界の中心で、明使はそれに捧げ物を持ってきた者という位置付けです。

スライド２



© 2017 SGRA

スライド 3



イラスト板垣真誠氏

これはわずか一つの例にすぎませんが、例えば三谷先生、葛先生、趙先生がおっしゃったような共通の通史の歴史叙述や史料集を作る場合は、望むべくは、一つの現象に対して複数の視点の史料ないし叙述をしていかなくてはいけないと思います。本日はその一例を提示させていただきました。

© 2017 SGRA

討　論 3

中国の教科書に描かれた日本

―教育の「革命史観」から「文明史観」への転換―

松田麻美子
早稲田大学

はじめに

中国の教科書に日本はどのように書かれているのだろうか。①中国の教科書をめぐる状況、②高校の歴史教科書に描かれた日本、③多様化する教科書、④教育の革命史観から文明史観への転換の四つの側面から説明する。

1．中国の教科書をめぐる状況（スライド1）

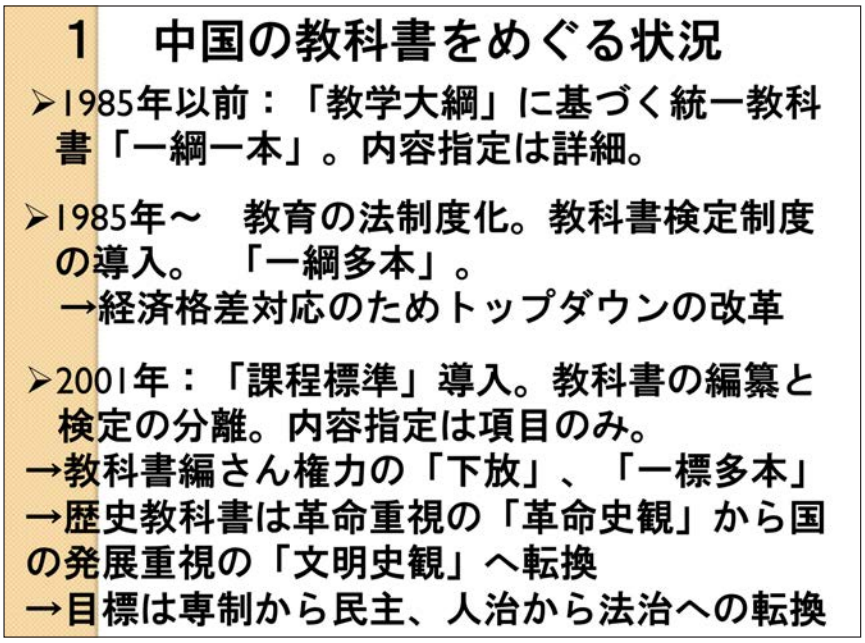
1985年以前は、中国の教科書は「教学大綱」に基づく統一の国定教科書の形を取っており、「一綱一本」といわれていた。「教学大綱」は、教科書の内容を非常に詳細に指定。国家教育委員会の下で、人民教育出版社が「教学大綱」の作成も教科書の編集も実施。教育の目標は、人々に革命により歴史が前進するという革命史観を理解させることだった。

1985年以降、教育改革が始まった。教育が法制度化され、教科書の検定制度が導入された。一つの「教学大綱」に基づき複数の教科書が編集された（中文：一綱多本）。国家教育委員会が、北京、河北、広東、四川、上海等の教育機関に教科書の編集を委託。これは地方の経済格差に対応するため、地方の状況に応じた教育のためのトップダウンの改革だといわれている。近代化、グローバル化に向けた教育を目指し、教科書から唯物史観、階級闘争といった革命史観的な内容が減少していった。

2001年に、「課程標準」が導入され、法制度上、教科書の編集者と検定実施者が分けられた。「課程標準」は教科書の記載すべき項目のみを指定。これは教科書の編さん権力の「下放」といわれた。教科書は文明の進展、近代化を重点的に記載する「文明史観」に基づくものに転換し、一つの「課程標準」に基づく多種類の教科書（中文：一標多本）という時代に入っていく。

© 2017 SGRA

スライド１

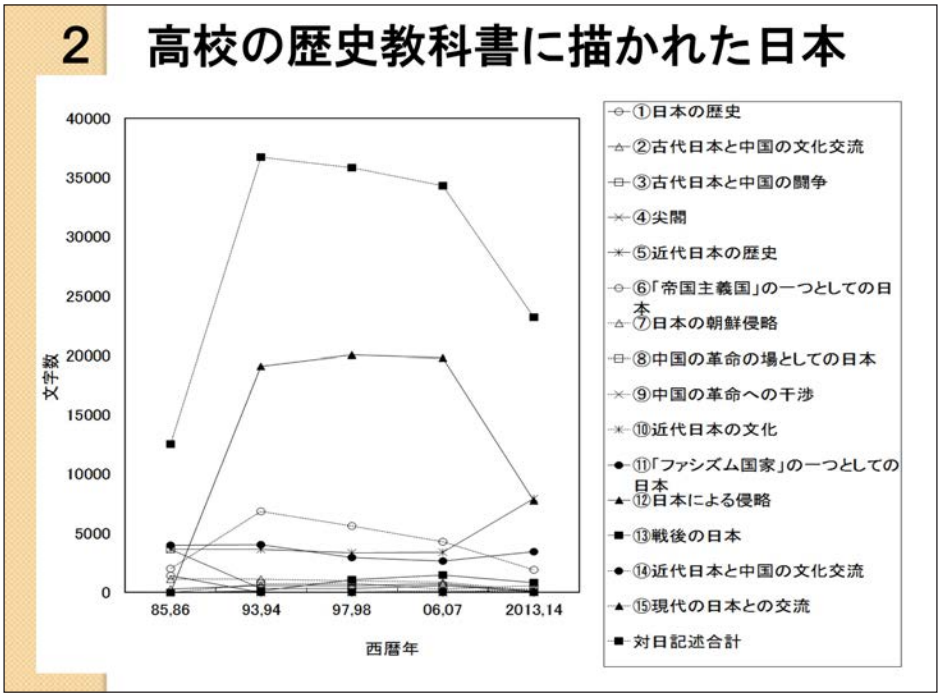


２．高校の歴史教科書（人民教育出版社版）に描かれた日本

（１）　高校の歴史教科書の対日記述文字数の推移（スライド２）

1980年代は「日本による侵略」の記載がない。これは、1980年代、高校では世界史しか教えられず、太平洋戦争はドイツとイタリアと並ぶファシズム国家の戦争として描かれ、抗日戦争として扱われていなかったためである。

スライド２



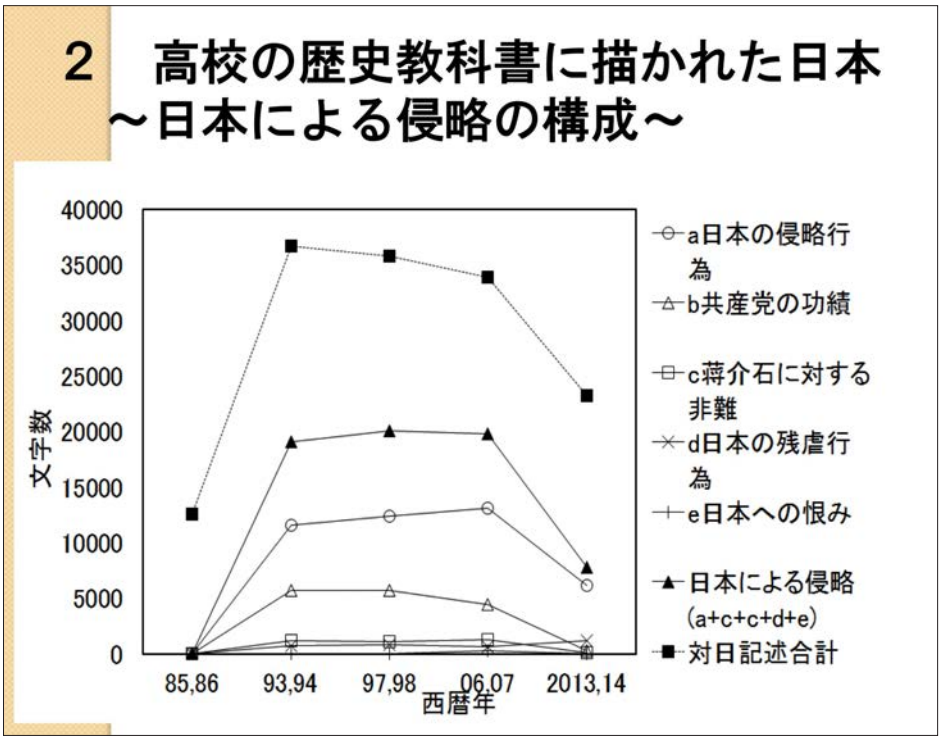
© 2017 SGRA

1989年の天安門事件を経て、高校では「中国近代現代史」及び「世界近代現代史」が教えられるようになり、1993年以降、「日本による侵略」の記述が増加。しかし、21世紀に入り「課程標準」の採用以降、「日本による侵略」の記述は大幅に減少した（2013、2014年版教科書が「課程標準」に基づく教科書）。
「戦後の日本」や「現代の日本との交流」の割合はどの教科書においても一貫して低い。他方で、2013年、2014年版は明治維新を主とする「近代日本の歴史」が「日本による侵略」の記述量を上回った。
「文明史観」に基づく「課程標準」の教科書では抗日戦争の位置づけは低下し、文明を発展させた明治維新は高い評価を得ている。

（2）「日本による侵略」の構成（スライド3）

教科書の対日記述のうち、「日本による侵略」の記述が半分を占める。「日本の侵略行為」は、抗日戦争における開戦、日清戦争や山東出兵などの戦闘の状況を指す。「日本による侵略」においては「共産党の功績」と「日本の侵略行為」が大部分を占めていたが2013、14年版では、「共産党の功績」の記述は大きく減少している。南京大虐殺、731部隊などの「日本の残虐行為」の割合は一貫して低い。

スライド3

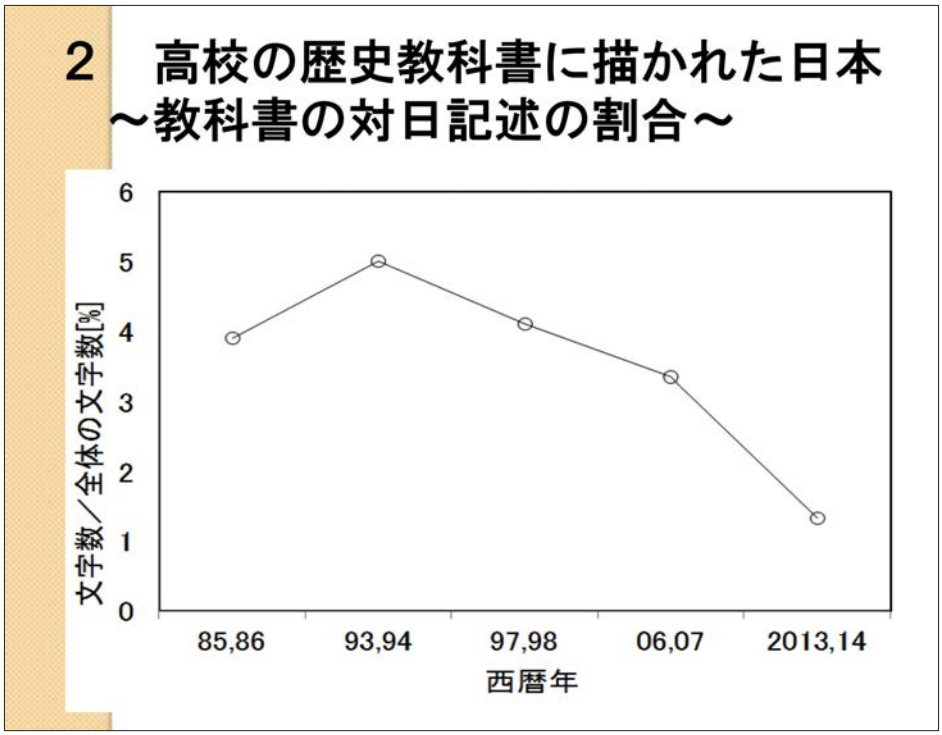


（3）教科書における対日記述の割合（スライド4）

教科書全体に占める対日記述の割合は、93、94年版では5%あったが、徐々に低下し、「課程標準」に基づく2013、14年版の教科書では1％近くまで下落している（スライド4）。

© 2017 SGRA

スライド４

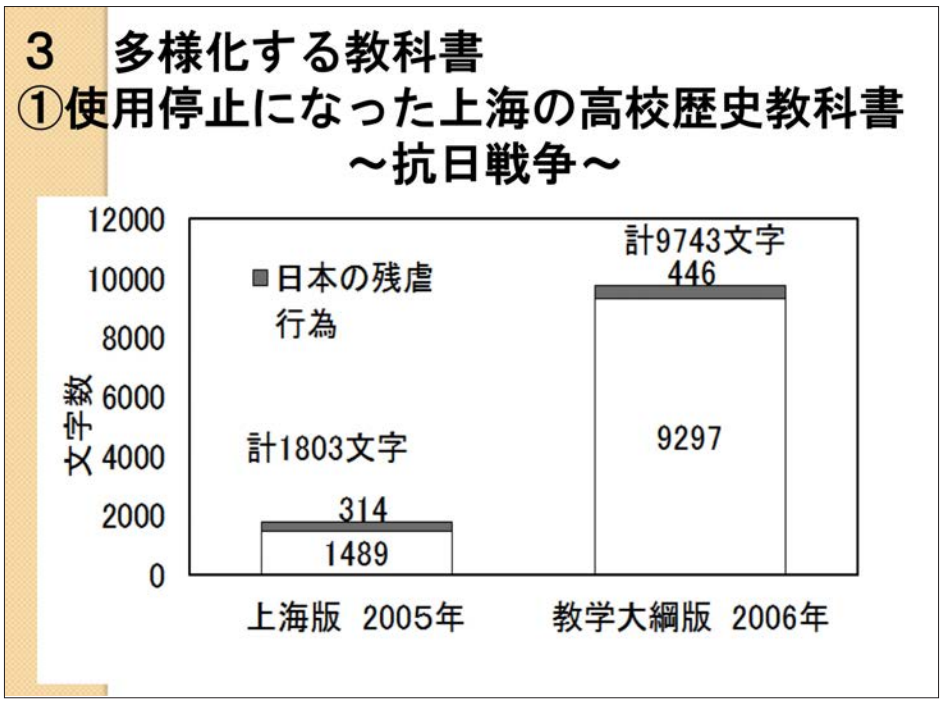


３．多様化する教科書

（１）上海の歴史教科書が描いた抗日戦争（スライド５）

2007年に使用停止になった上海の歴史教科書は、「教学大綱」に基づく2006年の人民教育出版社の教科書に比べて、抗日戦争の記述量は大きく減少しており、記載内容も簡潔である。

スライド５



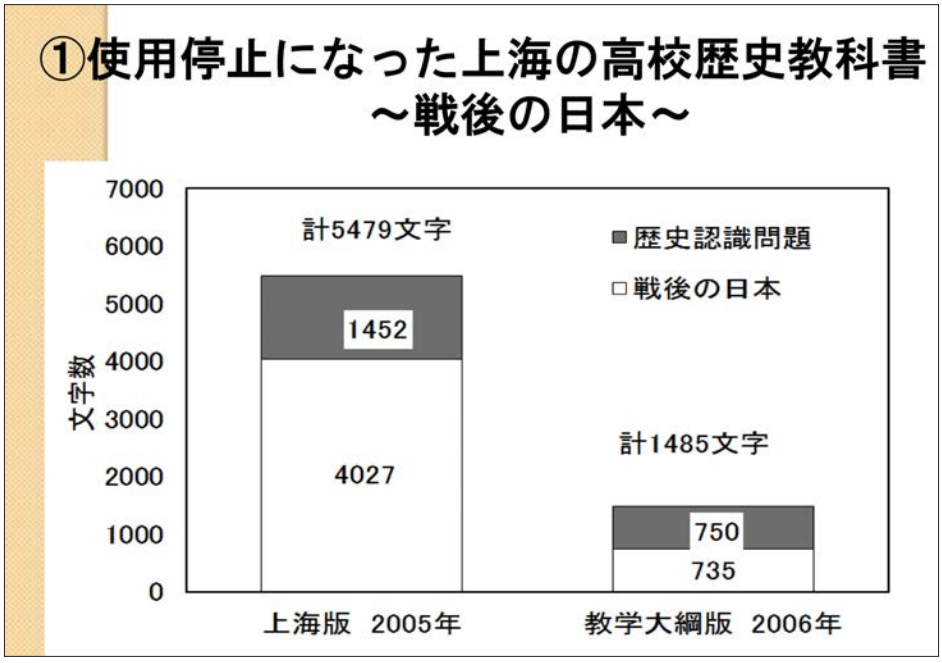
© 2017 SGRA

（2）上海の歴史教科書が描いた戦後の日本（スライド6）

上海の歴史教科書における戦後の日本の記述量は、人民教育出版社の教学大綱版と比べると大幅に増加している。教学大綱版は、戦後の日本については後ろ向きの記載が多い。極東軍事裁判や対日講和条約、日本の政治大国化の野望、防衛費の増大、自衛隊海外派遣への警戒、日本政府がアジアの人々に真の謝罪をしていないことが指摘されている。

一方、上海版は、戦後の日本の民主改革を正面から評価。「日本の戦後の改革は、明治維新以降、日本が目指してきた現代化を完成させた資産階級による上からの改革」、「戦後の民主化が高度経済成長の出発点」と指摘し、憲法制定、財閥解体、農地改革、天皇制の変化、東京五輪を目指した国家建設などを詳細に説明。他方で、防衛費の増大、自衛隊の海外派遣、ドイツと比較して戦後処理が不十分であること、靖国神社、歴史教科書問題、常任理事国入りの希望への批判も書かれている。

スライド6



（3）全国版教科書に描かれた抗日戦争（スライド7）

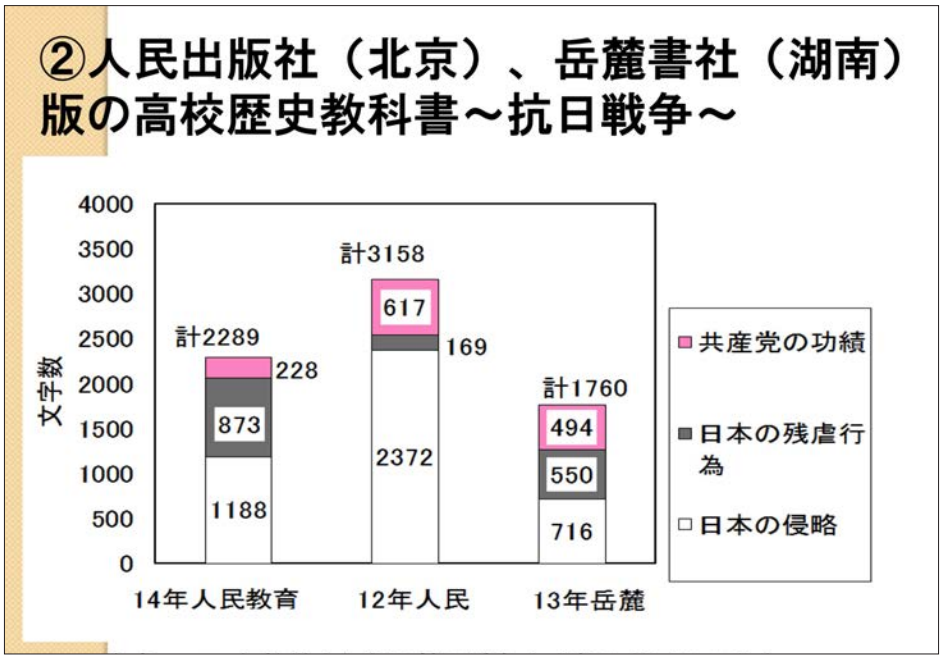
現在使用されている教科書の中で、70%という最大のシェアを占めるのが岳麓書社版である。一方、人民出版社版は、課程標準策定グループ長だった北京師範大学の先生が主導した教科書で、この二つを比較すると、出版社間で抗日戦争の記述量にばらつきがあることがわかる。

人民出版社版の内容はこれまでの党の既定路線に近い。抗日戦争の死傷者3,500万人、直接損害額1,000億ドル、間接損害額5,000億ドルという党の公式見解も記載している。岳麓書社版は、共産党成立から新中国成立までの歴史を一つの課、「新民主主義と中国共産党」というたった8ページに凝縮。共産党の功績の位置づけが低下したといえる。「教学大綱」に基づく人民教育出版社版の教科書は、

© 2017 SGRA

中国近現代史の教科書２冊のうち、４分の１を共産党成立から新中国成立までに割いていたのと対照的である。岳麓書社版は抗日戦争の死傷者数、損害額に関する党の公式見解を記載せず、「中国の軍人の戦死は130万人余り、物的損害額は500億ドル余り、平民の死傷者と財産の損失は数えきれないほど多い」と記載している。

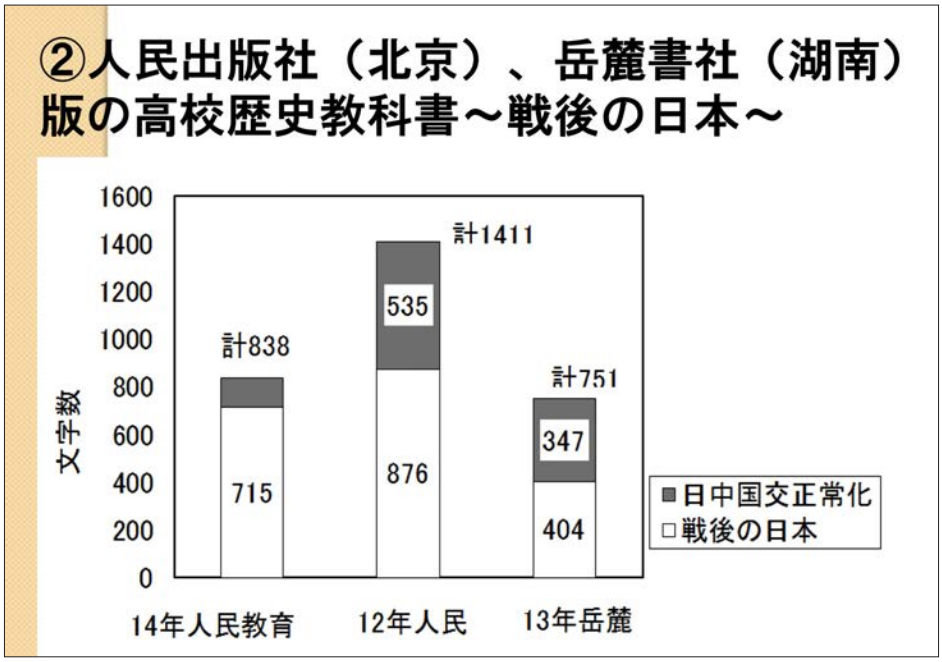
スライド７



(4) 全国版教科書に描かれた「戦後の日本」（スライド８）

人民出版社版及び岳麓出版社版は、日本の戦争責任の痛感、深い反省の表明という日中共同声明の内容を記載。戦後の民主化、経済発展、教育重視という日本の戦後の発展の状況を説明している。

スライド８



© 2017 SGRA

4. 教育の革命史観から文明史観への転換

中国の方々へのインタビューの結果、中国の教科書に対する不信感があり、教科書は党の「正しい歴史観」の押し付けで魅力がないと指摘された。これが「課程標準」を採用した教育改革の背景となっている（スライド9）。

教科書を執筆した学者たちは、「中華民族の間違いも語るべき。これまでの歴史的教科書は子どもに知恵を授けていない。教員は基本的史料も知らずに子どもに論評させている」と指摘。また、「日本による侵略を記憶するのは、日本を含めた平和のため。革命の後にどう国を発展させたかが重要である。教科書は歴史を正確に再現し、内容は安定したものであるべき」という発言もあった。

スライド9

4．教育の「革命史観」から「文明史観」への転換

- 人々の教科書への不信感。党の「正しい歴史観」の押しつけ、魅力がない（インタビュー調査より）。→「課程標準」採用の基礎に。
- 中華民族の間違いも語るべき。「教学大綱」の歴史教科書は子供に知恵を授けていない。教員は基本的史料も知らず子供に論評させている（大学教授）。
- 日本による侵略を記憶するのは、日本を含めた平和のため。革命の後にどう国を発展させたかが重要。教科書は歴史を正確に再現し、内容は安定したものであるべき（大学教授）。

スライド10

- 日本に対する厳しい報道の一方、教科書の抗日戦争の位置づけ（共産党の抗日戦争における功績）は低下、日本の戦後の民主改革を評価。
- 習近平政権成立後は揺れ戻し。習近平の上海の教科書批判。「課程標準」版教科書を非難する報道も。昨年末ネットに出回った改定中の「課程標準」は「教学大綱」の内容に逆戻り。
- 「文明史観」に基づく現在の「課程標準」は中央党校、党中央文献研究室の意見を聴取し、中国教育部が決断したもの。
- 中国共産党内の意見も一枚岩ではない。

© 2017 SGRA

日本に対する厳しいプロパガンダの一方、教科書における抗日戦争の記述量は大きく減少し、抗日戦争の位置付けは低下している（スライド10）。特に、抗日戦争における共産党の功績の分量は大きく減少。他方で、日本の戦後の民主改革が評価されるようになった。習近平政権成立以降は、言論統制が強化されている。一部の学者は、昔の1種類の国定教科書に戻すよう党中央に上訴している。他方で、「課程標準」は、中央党校や党中央文献研究室の意見も聴取の上、最終的に中国教育部が決断したものである。共産党、中国国内においても教科書に関する議論が活発に行われており、中国の共産党内の意見も一枚岩ではないことがわかる。

© 2017 SGRA

討　論4

東アジアの歴史を正しく認識するために

徐 静波
復旦大学教授

はじめに

徐静波と申します。復旦大学から参りました。招待討論者として、今日、主にご発表された趙珙先生、葛兆光先生、三谷博先生の３名の先生のご報告につきまして、自分なりの感想、あるいはコメントを述べさせていただきたいと思います。

1．趙珙氏へのコメント

まず、韓国の趙先生のご報告に関して、特に歴史研究、自国史、国史研究は周りの国々と関連しているところが多いと思います。趙先生は昔の高句麗の歴史を一つの例として挙げましたが、中国と韓国の立場でかなりずれがあるということです。韓国は本国史、自分の国の歴史の一部であると見ているのに対し、中国は、今までの立場ではあくまで中国の地方政権の一つであると見ている。中国と韓国は、全てではないと思うのですが、その認識にかなりずれがあります。ほぼ10年前に、既に『渤海国史』や『高句麗民族と国家の形成及びその変遷』などの分厚い研究書が出されています。しかしそれらの研究書はすべて「（中国）東北辺疆研究」という叢書に収められています。「中国視座」の強さはまだ残っていますよね。もし韓国の学者たちがご興味・ご関心がありましたら、中国で刊行されている高句麗研究と渤海国研究をお読みいただければと思いますが、いずれにせよ、私は趙先生のご意見に非常に賛同しています。

2．葛兆光氏へのコメント

葛先生は、ご存知のようにほぼ５年前、『宅茲中国』という非常に影響力のある大作を出されています。その主な意思を含めて日本語に訳された『中国再考』

© 2017 SGRA

という本を１冊、昨年か一昨年に岩波書店から出されて、一時期ベストセラーになったそうで、第26回アジア太平洋賞の大賞を受けたそうです。葛先生は、今日の政治的な領域によって過去の歴史を見るのは間違っている、そのような歴史の見方は正しくない結論を導く恐れがあると指摘されました。今日のお話の中でも、できるだけ歴史がまだ形成されていない時代に戻って、当時の歴史を見るのがいいのではないかとおっしゃいました。私はその意見に全く賛同しています。高句麗に関しても、渤海国に関しても、あるいはこのような類いの例に関しても、今の政治的な領域、今の中華人民共和国の版図、今の大韓民国あるいは朝鮮半島の版図ではなく、その当時の歴史の現場に戻って、歴史の文献、今の考古学の成果に基づいて冷静に研究して分析した方がいいと私は思っています。

本日の発表で、葛先生は中国と日本と朝鮮半島に関してどのように事件を見ているか、三つの例を挙げました。それについては以前にも葛先生は論文の中で非常に詳しく分析しています。今回の葛先生のご報告に関しては、ただ、一つの事実だけ指摘しておきたいと思います。葛先生が例を挙げた四つの中国の国史の著作はほぼ文化大革命以前に書かれたもので、もちろん文化大革命が終わってからも版を重ねており、特に私の記憶では1980年代あるいは1990年前半において、教科書あるいは何らかの形で広く読まれていたようですが、今の影響力はだいぶ薄くなっているということもまた事実です。

3.三谷博氏へのコメント

最後に三谷先生のお話です。まず、私が韓国、中国、日本の３名の学者の方々のご発表を拝聴して、共通する一つの感想は、ナショナリズムの匂いがほぼないといっていいぐらい、冷静な学者の立場に立っていて、葛先生はむしろ冷静に昔の影響力が大きい中国の国史の著作について反省して、ある程度批判したと思います。三谷先生のお話では、中教審は歴史教科書で、日本の近現代史を「近代化」「大衆化」「グローバル化」の３本柱で捉えるということでした。私はこれを見ていて、三カ国の方々もみんな明晰に覚えている歴史ですが、1894～1945年、日清戦争から第２次世界大戦が終わるまで、日本では断続的に50年間にわたる戦争の時代がありました。もし過去の戦争について十分な反省がなかったら、真の平和主義が成り立つのか、私にはちょっと疑問があります。私が拝読した三谷先生のご発表の中で、「日本に即して言えば、次の節目として、20世紀初頭のいわゆる『帝国主義』が無視できない。国民の居住地から離れた他言語・他言語の社会を支配し……」とありましたが、これは多分、中国と台湾と韓国を指していると思うのですが、やはりそのような歴史を無視すれば、真の日本の近現代史を語ることができるのか、ちょっと疑問です。

中国人が、日本人の方々がいかに自分の近現代史を認識しているかを知るためには教科書だけでは物足りないという考えから、私は去年から、岩波新書の10冊から成っている『日本近現代史』という文庫本をどうしても中国語に訳して中国の読者に読ませたいと思っています。私は企画者の一人として、香港の中和出版公司と連携し、10冊全部を中国語に訳して、計画としては、今年の年末

© 2017 SGRA

までに10冊全部を出そうとしています。今までに既に5冊出しました。日本では2006～2010年に岩波書店から出されたものです。香港で出版されたものは繁体字の中国語なので、中国大陸でどれぐらい広げることができるか分かりませんが、私の知っている限りでは、上海人民出版社など何社かの出版社で簡体字で10冊の『日本近現代史』を出す計画があるということです。

おわりに

お互いに相手国の人々が自分の近現代史、自分の国史をどう見ているか、それを十分認識した上で、できれば葛先生のご提案のように、民間レベルで、学者レベルで、東アジア地域史を書き上げることができることを、私たち学者としては非常に期待しています。以上です。ありがとうございました。

© 2017 SGRA

討　論 5

「国史たちの対話」の進展のための提言

鄭 淳一
高麗大学助教授

はじめに

こんにちは。高麗大学、歴史教育科で勤務している鄭淳一と申します。先生方、コメンテーターの皆さまの良い発表、良いコメントがあり、大変いい勉強になりました。先生方の発表、コメントを参考にしながら、重複しない範囲で三つほど申し上げたいと思います。

1．新しい出発に先立ち：先行事例の把握

まず、大学の専任職に就いてあまりたっていないので、指導している大学院生はまだいませんが、後輩たちに勉強はどうすればいいか、よく聞かれたりします。そのとき、「関連資料を全部集めなさい」、「先行研究をちゃんと調べて読みなさい」と、必ずこの二つは言っておきます。私たちが日中韓における国史たちの対話の可能性について議論するのも、ある意味で一つの新しい研究の出発と同様だと思います。新しい出発に先行して、これまで行われてきた類似事例にどういったものがあるか把握しなくてはいけないと思います。第一に、日中韓における国史たちの対話の可能性のような試みが過去にあったかどうか、あったとすればどういった内容であったかを把握することです。

劉傑先生の問題提起でも、日中間では2006年、安倍首相の発言によって歴史の対話があったというお話がありました。それに先行して2002年から、韓国と日本の間で日韓歴史共同研究委員会が発足し、３年間活動したことがあります。趙珖先生は当時から参加されていました。また、2007年からは第２期の歴史共同研究委員会が３年間活動しました。2005年、2010年３月にそれぞれ１期と２期の報告書がまとめられました。それは政府レベル、あるいは国家がサポートするレベルの共同研究活動ですが、新しい出発を前にして参考にしてもよいのではないかと思います。

© 2017 SGRA

また、政府レベル、国家レベルの努力だけでなく、民間レベルの学術交流も多くなされました。私が知っている範囲で韓国の事例を申し上げると、日韓の間では、日韓共通歴史教材『向かい合う韓日史（日本語版タイトル：日韓交流の歴史）』『朝鮮通信使　豊臣秀吉の朝鮮侵略から友好へ』という共同のテキストを出版した例があります。日中韓３国が参加したものとしては、『未来をひらく歴史』、『新しい東アジアの近現代史』といった成果があげられます。

そういった点も参考にしていただきたいと思います。

2．日中韓の関係史辞書編さんの試みに向けて

また、劉傑先生から、仮称『日中歴史辞書』刊行の提案もありました。それを受けて、趙珖先生からも、日中韓の関係史辞書も作ろうといったお話がありました。それぞれの国がどのように理解しているのか、どういった部分を共有しており、それぞれどのような特徴を持っているのかについて互いに把握しようということです。

韓国の例を申しますと、東北亜歴史財団というところで、まだ刊行はされていないのですが、『東アジア関係史辞典』を編さんしており、最終修正段階にあると聞いています。もしこの集いで日中韓の関係史辞書編さんの試みがあるとすれば、日本語で言えば「たたき台」が必要となるかと思われますが、韓国で近いうちに発行されるはずの辞典も、一つの参考にすればどうかと考えます。限界を克服するのに良いサンプルになるだろうと思います。

3．韓国高校教育における「東アジア史」の試み

続いて三つ目です。早稲田大学の松田先生からも、歴史教育の側面から素晴らしいプレゼンテーションがありましたが、それに関する韓国の経験を少し申し上げます。韓国では今、高校レベルで「東アジア史」といった科目を教育しています。2014年に授業に導入されて、来年度からは、新しいカリキュラムによる教科書が授業の現場に用いられると聞いています。韓国内でも「東アジア史」科目、「東アジア史」教科書が持つメリットが何なのかなどをめぐってさまざまな議論があるのですが、もし日中韓の人々が共通の理解をつくっていこうといった議論を持続的にしていくとするならば、韓国の「東アジア史」教科書を参考にしていただいてもよろしいのではないかと思います。

4．付け加え：次世代研究者の学術交流または対話の場を

最後に一つだけ補足したいです。これはさまざまな先生が既におっしゃいましたが、私も類似した提案をしてみたいと思います。若い研究者、次世代の研究者の学術交流または対話の場を持続的につくっていこうといった提案です。AFC（アジア未来会議）というカンファレンスもそうした性格の一環だと思っています。歴史という部分に制限するならば、既に活躍されている先生方と共に議論す

© 2017 SGRA

ることももちろん重要ですが、より若いレベルの研究者たち（果敢に提案するとすれば日中韓の高校生たち）が集まって互いに歴史認識の違いを共有し、なぜ日本、中国はそう考えるのか、なぜ韓国人はそういった話を繰り返すのか等、少しでも早い段階から対話をしていく、そして認識を共有していくのがよいのではないかと思います。以上をもちまして終わりたいと思います。ありがとうございました。

© 2017 SGRA

討　論 6

国史における用語統一と目標設定

金 囝泰

高麗大学校人文力量強化事業団研究教授

はじめに

皆さん、こんにちは。私は高麗大学の金囝泰と申します。本でお目にかかった先生方と一緒にお話ができまして大変光栄に存じます。日ごろ考えていることを幾つか申し上げて、先生たちのご意見をお伺いしたいと思います。二つだけ簡潔に申し上げます。

1．用語の統一の問題

一つ目は、東アジア三カ国の共通の事件に関する用語の統一の問題です。私の専攻分野は先ほど話題に出た「壬辰倭乱」です。日本では「文禄・慶長の役」といいます。中国では、「万暦朝鮮役」といわれています。韓国の壬辰倭乱の「壬辰」というのは干支です。これはある意味、中立的な用語ですが、しかし「倭乱」というものは「倭」、（蔑視を伴った）政治的用語なのです。それはあまり歴史的な用語とは言えないものではないかと思います。

それで、「壬辰戦争」というのが客観的なものではないかと考えるのですが、発表誌などに論文を載せたら、まだ韓国の国民情緒には合わないのではないのかと思います、それでいろいろ大変な目に遭ったりします。このように一国でも一つの言語を統一するのが難しいです。三カ国統一のものをつくろうとすればさらに大変ではないか。これを無理に一つにするのは非常に大変な作業だと考えています。このような分野ではいろいろ悩みがありますが、先生方はどのようなお考えなのかを伺いたいと思います。

© 2017 SGRA

2．国史に対する目標設定とは

二つ目に、国史教科書、国史研究の目標をどのようなものにするのかについて伺いたいです。先ほど先生方が発表されたように、国史の今までの目標は、自国のプライド、自国 の誇らしき歴史、わが国の歴史を示すことである傾向が強かったと思います。しかし、これは有効な目標ではなくなったと考えられます。だとすれば、新しい時代の国史研究はどのような方向で行くのか、いろいろ発表されましたが、これについて何か付け加えたいことがあればお伺いしたいと思います。

以上です。よろしくお願いいたします。

© 2017 SGRA

円卓会議・ディスカッション

モデレーター：南 基正／総　括：劉 傑

南　どうもありがとうございました。これでひととおり、指定討論者たちの討論が終わりました。当初、争点を発見して、それについて討論ができればしたいと考えていましたが、時間が足りなくなっているというのもありますし、聞いてみると、論争することがこの会議の目標ではない気もします。争点を取り出すことより、さまざまな角度、さまざまな視点から問題を提起してそれを共有することがある意味ではこの会議の目標ではないかという気がします。足りないところをもう少し取り出して、問題提起の形を良くしていくという方面に、残った時間を使いたいと思います。

フロアの方々から、今扱われていない問題があるとか、これはぜひともこういう方面から考えてほしいという補完、コメント、質問がありましたら、お二方ほどお話を伺いたいと思いますが、どなたかお話しいただけますでしょうか。簡単に自己紹介もお願いします。

© 2017 SGRA

北朝鮮の国史の扱いと歴史教育の問題

フロア１　川崎剛と申します。朝日新聞の元記者です。政治的、技術的に非常に難しいので、躊躇しながら申し上げるのですが、きょう話題にした地域には、北朝鮮という国があります。北朝鮮のオフィシャルな見解をどこかで参照できるようにできないでしょうか。北朝鮮にもオフィシャルな国史がきっとあるに違いない。日中韓と相当違う見方を主張していると思います。例えば、1950年6月25日の朝鮮戦争でどちらが侵攻したのか、ということなどもそうです。そのようなことが、例えば、三谷先生ご提案の史料集などに書いてあれば、そういうことを読みたいと思います。

南　ありがとうございました。非常に大事なポイントだったと思います。もう一人ぐらいお話を聞ける時間があると思います。お願いします。

フロア２　北陸大学の李鋼哲と申します。私の分野は経済学なのですが、歴史家、歴史専門家たちの話に随分関心があり、今日このような話を聞いて、目からうろこが落ちるようないろいろな収穫がありました。私はこの会議で、中国語も韓国語も日本語も通訳なしで、皆さんの言語でちゃんと真面目に聞きました。その点、非常に私にとって居心地のいいところだったので、ありがたく思います。

皆さんのお話のテーマは、歴史家たちの対話の可能性を模索することでした。私の専門分野は歴史ではないのですが、北陸大学の教育現場で日中文化交流史など歴史のことを教えるようになって、それから歴史の勉強をしています。しかし、やはりどうも研究する者・教科書を作る者と、実際の教育現場の格差があると感じます。特に日本の場合は、高校などの歴史教育は近代、明治維新ごろまでで終わって、その後はおろそかになってきちんと教えていないとよくいわれます。確かに私も、近代史、日中交流史を教えながら、近代史について日本の学生たちと

© 2017 SGRA

対話してみると、ほとんど関心がないか、分からないのが現実です。明治維新でさえも日本人学生はきちんと答えられません。もちろん学力差があるでしょうけれども、そういうところに関心が薄いことと、やはり教育の仕方で、国民に教育がきちんと伝わっていません。

中国と韓国の教育現場はどこまでやっているのかよく分かりませんが、私の記憶では、中国では近現代史を逆に重んじて教育しています。日本はその逆です。このような国による格差があるのです。今は日中韓３カ国で歴史問題がごちゃごちゃしていますが、われわれは未来に向けてこういうことを設計しているので、未来の若者たち、20年、30年後の若者たちが、東アジアの視点に立って、きちんとした歴史が分かるようにするためには、どのようなことをやるべきなのかについて、教育現場でどのように教育したらいいのかということも含めて、皆さんからご英知やコメントを頂ければと思います。

アジアの共通の未来のために「歴史」「歴史家」ができることは何か

南　どうもありがとうございました。フロアからのコメントはこれぐらいにして、ここで本日ご報告いただいた三人の先生の総括・ご意見を伺いたいと思います。そして最後に劉傑先生に総括していただくことにしたいと思います。

先生方が先ほどの報告でできなかったこと、逃したことを中心に話していただいてもいいですし、今日のお話を聞いて新しく展開した考えなどがあればそれを提示していただくのもいいと思います。しかし、１点だけ、三人の先生に共通してお話を聞かせていただきたいものがあります。それは最初の問題提起にあった、この地域における「知の共同体」、アジアの共通の未来をつくっていくために歴史、または歴史家たちができることは何かということです。それについてもう少し具体的にお話をしていただきたいと思います。この地域における「知の共同体」の現状はどこまで来ているのか、どこに向かうべきなのか、そのために先生ご自身も含めて、われわれができることは何か、それをここに集まった人たちが具体的につかんで、この場を離れることができるようにしていただければと思います。

それでは報告の順番で、趙先生からお願いしたいと思います。

趙　いろいろな討論者の皆さまのお話を傾聴しました。討論者の共通の認識は、アジアの歴史をどのように共有することができるか、相互歴史認識をどのようにす

© 2017 SGRA

れば一致させることができるかということだったと思います。そのためには、東アジア的な固有の見方が重要だという意見にも同意します。少なくともいったんはトータルな立場からその事件を見る必要がありますが、より重要なのは、歴史とはそれ自体が事件と解釈の結合体であるということです。また、歴史は生物です。生きて動いているもののように変化します。変化するその歴史を正しく解釈することで、司会者が今提示された地域共同体あるいはアジア未来構築のための努力ができると思います。

ここで一番重要なのは、相互理解の強化のためにどういったことをしていかなくてはいけないかということです。青年の交流、より若い青少年の交流も必要だと思います。全ての交流は同時代的に同時に進行されるべきだと思います。青年交流、青少年交流と、政府レベルでの交流、NGO レベルでの交流が同時に進行されるべきだと思います。自分が政府間の対話に長い間参加した経験から感じるのは、NGO 間の交流が非常に効果的だということです。民間団体間の交流が政府間の交流より大きな意味があるのではないかと感じました。政府間の交流では、ややもすると自国民の代表選手になって発言せざるを得ないときがあります。しかし、それは歴史認識・理解のためには警戒しなくてはいけないという側面も持っているので、まず民間人の対話が十分に成熟しなくてはいけないと思います。そして政府間の交流もたゆまず進められなくてはいけません。

私が日韓の歴史対話を始めたときは小泉総理の時代でした。小泉総理の提案によってその対話がスタートしました。それ以降、さまざまなプロセスを経て、今日は日韓の歴史の公式な対話は断絶されています。政府間の対話が持続されなければいけない、それ以上に民間人の対話も進められなければいけません。また、アジアの歴史が目指すのは共存と繁栄と平和です。日中韓の３国が共存し、共に繁栄し、共に平和を享受しなければなりません。それが重要な歴史的な価値になると思います。未来を目指すときは、こうした方向の歴史観を持っていくために、また、こうした見方から、過去の歴史を解釈しようとする努力が研究者の一人一人に要求されると思います。皆さまが共に努力をしていかれればと思います。以上です。ありがとうございました。

南　ありがとうございました。それでは葛先生、お願いします。

葛　趙先生のお話に同感です。全く賛成です。われわれは限られた国の立場を乗り越えるという共通認識を持っています。私は実は皆さんの話を聞いてヒントを得ました。新しい感想を申し上げます。

まずは趙先生の話です。「中国」は一つの言葉、名詞ですから、中国という土地、国土に出てきた国々を全て代表していると思われています。しかし、現在中国ではそのような立場、そのような発想は既に是正されています。中国という土地、国土に存在してきた国々は、中国ではない、あるいは現在の中国政府とのつながりは割と薄いという認識が徐々に定着するようになりました。

もう一つ、劉傑先生の「国史」という言葉ですが、現在、中国では「国史」という言葉は「中華人民共和国」というカテゴリーの中に収まっているわけではあ

© 2017 SGRA

りません。では、中国はいつ「国史」を使うかというと、例えば第２次世界大戦のときに、一番有名な本は『国史大綱』でした。当時は民族が存亡の危機に立たされていたので、「国史」という言葉が特に強調されました。また、歴史的には、中国は徐々に発展していって、ナショナリズムの全盛期には「国史」という言葉がしばしば使われます。ですから、東アジアにおいて各国は、特に３カ国では、一つは存亡の危機に立たされているとき、もう一つは経済が高度成長するときにしばしばナショナリズムが発展してくるわけです。そういう場合、われわれは往々にして政府に影響されてしまいます。やはり国史の意味合いという視点から研究しなくてはいけません。

もう一つあります。国史とは歴史認識であるのか、あるいは歴史の叙述であるのか。これは先ほどの橋本先生のお話です。われわれは国史の範ちゅうを乗り越える場合、歴史認識を前進させなければなりません。歴史の叙述を変えなければなりません。しかし、東アジア３カ国において、歴史の国史を乗り越えるのは、今、中国は一番困難な時期だと考えています。乗り越える時期ではない。日本と韓国では今までずっと「東アジア史」あるいは「東洋史」という言葉が存在してきました。しかし中国を見てみましょう。中国では、「東アジア史」「東洋史」という概念は今まであまり見当たりません。ですから、国の立場を乗り越えて、歴史を記す場合、中国が一番難しいと言えましょう。

だから、私が強調したいのは、民間レベル、民間のパワーを生かさなくては、共通した、共有できる歴史を語ることはできないということです。中国では、国に左右されて、政府に左右されて歴史を記されるという状況がずっと歴史に存在しています。ですから、国のレベル、国の立場を乗り越えて、東アジアの共通の歴史を記すには四つ克服しなくてはいけません。１番目は政治制度、２番目はイデオロギー、３番目はそれぞれの国の背景、４番目は歴史の記述の習慣あるいは傾向です。この四つを克服しなければ、共通、共有できる歴史は語れないのです。

南　どうもありがとうございました。三谷先生、お願いします。

三谷　最後になって有意義な意見がいろいろ出てきたと思うのですが、私自身は、今まで東アジアで展開されてきた「知の共同体」にある程度成果があったのは間違いないと思います。劉傑先生と10年以上前から始めた仕事がある程度成果を挙げましたし、他にも先ほどもいろいろとご指摘があったように、民間レベルでの国境を超えた共同作業がうまくいった場合が少なくなかったと思います。その蓄積は、始める前と比べると随分違います。率直に言って、この世紀の初め、劉傑先生に「一緒に日中間の共同研究をしよう」と言われたときは、ある程度怖かったです。はっきりとは口に出さなかったけれど、互いにおびえていたのです。だから、始めて３～４年経ったころに、これは大丈夫そうだと分かったときは本当にうれしかったですね。そういうお互いに持っている恐怖心が失せたのは良かったし、これからも再燃しないようにするのはとても大事だと思います。

ただ、これから将来に向かってどうするかというのが問題です。いろいろな論点はありますが、第１に、大学で歴史を教えていて、ほとんどの学生が歴史に興

© 2017 SGRA

味がないこと。特に日本人の隣国に対する関心は非常に乏しいです。できるだけ避けて回る、これが事実です。それを克服する方法の一つは、いま文科省が高校の地歴科に導入しようとしている「歴史総合」の中で推奨されているアクティブラーニングで、具体的な論点を取り上げて、資料を持ち寄り、ああでもない、こうでもないと生徒たちに勝手に議論させる。結論があらぬ方向に行くのは困りますが、そのようにやれば自分のこととして考えられるようになる。教科書を丸暗記するのは全く意味がない。すぐに忘れます。日本では一部の熱心な高校の先生方が随分努力していらっしゃって、実際に成果を挙げているので、これが他の先生方に受け入れられて国内に広がるかどうかはかなり大事なターニングポイントだと思います。

また、葛先生が強調されている東アジアで共同研究を進めるべし、共通の東アジア史を作るべしというご意見ですが、これは今までと同じやり方だと無理だと思います。はっきり言って、特別優秀なエリートだけが集まって、特定のテーマを設けて、かんかんがくがく議論して一つの本を作るということはもう今では十分に可能になっていて、意義があることだと思います。そういうことと、一般向けに例えば高校の教科書レベルでいわれているような３国共通の教材を作るとか、教科書を作るというのは全く別の問題でして、これを混同するわけにいかないだろうと思います。

私自身は大学レベルの東アジア史の教科書をかつて出版したことがあるし、それは韓国では翻訳が出ています。しかし、中国版は出ていません。この大学レベルの教科書は丁寧に説明してあって、他の本を見なくても重要な知識はほとんど手に入るものなので、これは有効な出版だったと思いますが、今のところ他ではそんなに盛んではないように見えます。なぜか皆さん、非常に簡略な高校や中学の教科書ばかり気にされている。これは困ったことだというのがかなり昔からの私の印象です。

それから、史料集の件なのですが、これは作るとなると、３カ国語をお互いに翻訳しなくてはいけない、作る過程でも通訳が必要ということで、大変な作業になります。始めたら恐ろしく手間がかかる。そのためには、これまた最初からテーマを絞ることが必要だし、人選も大事です。日本で言えば、特に若手の人たちが大学院生を動員して作ってくれるのがやりやすい方法だと思いますし、それを熱心にやろうという人はいます。ただし、その人たちは日本人の場合は中国史や韓国史の学者であって、日本史の学者ではありません。ですから、ここでも日本史の学者をどうやって動員するかというのがかなり重要な問題です。

本当は、「案ずるより産むが易し」で、実際に始めてしまうのが一番いいのです。当面問題になっている国際関係、特に近現代の部分については、とにかく始めてしまえば何とかなるかもしれないという印象を持っています。ただし、私自身は今、自分で引っ張っていくだけの時間がないので、どうしていいか分かりません。先ほど趙先生も、葛先生も、これは結構面白そうだと思ってくださったようですが、３国に跨がってやるともっと大規模になってくるので、これもまた、ごく選ばれた人たちだけで始めるしかないだろうと考えています。

© 2017 SGRA

南　どうもありがとうございました。最後に劉傑先生、お願いします。

劉　報告された先生方、コメントをされた先生方、どうもありがとうございました。長時間どうもお疲れさまでした。最後の先生方のお話はすでに今日の全体のまとめになっていると思いますが、あえて少しだけ付け加えてみたいと思います。今回は「国史たちの対話」という形で始まりましたが、以前からいわゆる「歴史対話」を長期にわたって行ってきました。このような試みは、10年以上東アジアの中で行われてきました。これに対して、今回の対話を初めて「国史たちの対話」と位置付けたいと思いました。今回の対話はとても意味深いものがあり、また大きな成果があったと高く評価しています。

また、先ほどから、多くの先生方の話の中にもありましたように、今までは政府主導の対話が重要なウエートを占めてきましたが、今回は学者同士だけのネットワーク、渥美国際交流財団というネットワークを活用した自発的な対話であり、この点の意味は非常に大きいと思います。

さらに、従来の対話はどちらかというと、自分自身の立場を相手に説明する、あるいは相手を説得するための対話という性格が非常に強かったように思います。今回は相手を説得するのではなく、相手を理解するための対話となりました。この方向転換に私は大きな感動を覚えました。これからの歴史対話の意義はまさにこういうところにあるのではないかと考えました。

自分の国の歴史観、国史と言ってもいいのですが、これを一つの円に例えるならば、自分の円の外にはたくさんの同じような円が存在しているということを国史研究者が認識し、そして自分の円を飛び出して、隣の円にも入って中身を見てみることが求められています。これが本当の意味の歴史対話であるという問題意識をわれわれは今回の対話で共有することができたのではないかと思います。

具体的な提案も多くの先生方から出されました。例えば、三谷先生が提起された歴史史料集の編集作業や、趙先生が提案された3カ国の歴史辞典の編集事業です。どれを取り上げても大変大きな事業で、どのようにこれから展開していくのかについて、先生方と一緒に、この「国史たちの対話」の中で一つ一つ具体化していきたいと思います。

先ほど今西さんから、最低5年間は続けたいという大変心強いお言葉を頂きました。差し当たって、来年以降はどうすればいいのかということを考えなくては

© 2017 SGRA

いけないのですが、例えば、史料集を編さんする、あるいは辞書を編さんする場合、テーマだけを決めて、「このテーマならわれわれはこういう史料を使って研究している」など、各国が研究上用いる史料を出し合って、お互いどういう史料を使って研究しているのかを確認し、その史料に対する解説を行う、というような方法もあり得ると思いました。これも一つの対話の形ではないかと思ったのです。

具体的に今後、この対話をどう継続させていくのかはこれからの宿題になりますが、先生方と一緒に考えていきたいと思います。そして、これを継続するには、渥美財団のリーダーシップ、ご支援は非常に貴重なものです。今西さんをはじめ、財団の皆さまに心から感謝を申しあげると共に、この対話と研究活動を引き続き引っ張っていくことをお願い申しあげます。

今日は本当に長時間、貴重なご意見をいただくことができました。ありがとうございました。

© 2017 SGRA

あとがき

今西淳子

2016年9月30日（金）午前9時から12時30分まで、北九州国際会議場の国際会議室で、円卓会議「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性」が開催された。日本、中国、韓国から歴史研究者が集まり活発な議論が交わされた。88人が定員の会場は満席で、人々の関心の高さが示された。

最初に早稲田大学の劉傑教授が、問題提起の中で「なぜ『国史たち』の対話なのか」「『国史』から『歴史』へ」「対話できる『国史』研究者を育成すること」と題して、最近の10数年間の日本・中国・韓国の「歴史認識問題」をめぐる対話の成果、また留学生の増加と大学の国際化に伴う「国史」から「歴史」への変化を認めながらも、「国史たち」の対話をより実質的なものにするために、現在の研究者同士の交流をさらに進めると同時に、10年後、或いは20年後に本格的な国史対話が行えるような環境を整備することが重要であると指摘した。

次に、高麗大学の趙珖名誉教授は、東北アジアの歴史問題は自民族中心主義と国家主義的な傾向から由来するとし、韓国で近年編集された学校教科書、学会の日本関係史、中国関係史の叙述について分析した。(1)「前近代中国に対する叙述」では、高句麗史をめぐる混乱を通じて「華夷意識」に言及、また、(2)「前近代日本に対する叙述」の結論においては「全体的に（韓国の）教科書でみる前近代日本は、文化後進国として（朝鮮の）先進文化の受益者、そして侵略者としての姿である。これは一面的には妥当だが、正確ではない。日本をひとつのまともな関係主体としてみなさない国史教科書の認識は、韓国をめぐる現在の様々な難題を解決し、正しい韓日関係を作るのに役立つとは思えない」と主張した。そして、(3)「近代東アジアに対する叙述」では、19世紀以後の東アジアは、一国の状況のみで自国史を述べること自体が不可能であるほどに三国の歴史が絡み合っているのに、韓国近現代史の教科書に中国と日本の近現代史に関する内容が殆ど出てこないこと、朝鮮戦争の場合でさえ、内部政治や経済や社会に関する説明が溢れ、参戦した各国の論理が紹介されないことを指摘、近現代史の場合、中国史のみならず、日本史と連結して説明することによって脈絡を理解できるようになる、自分を読むことも重要な仕事であるが、如何に他人を読めばよいかという問題も重要である、と結んだ。

復旦大学の葛兆光教授は、「蒙古襲来」(1274、1281)「応永の役」(1419)「壬申丁酉の役」(1592、1597）を例にして、国別史と東アジア史の差異を論じた。一国史の視点から見ると、ひとつの円心の中心部は明晰でありながらも、周辺部はぼやけてしまう。もしいくつかの円心があれば、幾つかの歴史圏が形成され、

© 2017 SGRA

それが重なる部分がでてくる。東アジア史を語る場合、この歴史圏の重なる部分を浮き彫りにする必要がある。たとえば蒙古襲来によって、日本が初めて「神国」と思われるようになり、日本文化の独立の端緒が開かれ、中国の「華夷秩序」から離脱したと日本史には記述される。ところが高麗は蒙古化され、蒙古人が日本に侵略する際、その前線基地になった。一方、中国では蒙古／元朝は「自国史」と見なされ、蒙古襲来は、蒙古と日本と高麗という中国の外で起こったこととされる。東アジア全体の視野で見れば、蒙元の日本侵略（または高麗を従属国にすること）は、東アジアの政治局面のみならず文化的にも各国の自我意識を喚起し、東アジアの「中国中心」の風潮が次第に変わっていくきっかけとなったと解釈できる。同様に、応永の役の発生及び解決は、その後数百年の東アジア国際関係の安定に導いた。「壬辰の役」は、それまでの安定した東アジア国際関係を大きく揺らし、その後の東アジアが共有していたアイデンティティの崩壊の伏線を引いたが、当時はこの事件も速やかに収まり、東アジアのバランスのとれた局面は、19世紀に西洋諸国が武力を背景に東洋に進出するまで続いた。しかし、中国の歴史では、蒙元の日本侵略と高麗支配は、ただ蒙古人の世界支配の野心の現れに過ぎず、朝鮮の対馬への侵攻も隣国同士の紛争、「壬辰の役」に到ると、日本は侵略者であり、中国は朝鮮の国際的な友人として、両国が手を携えて日本侵略軍を打ち負かしたと明言する。もし歴史学者が東アジア史の視野をもって見直したら、新しい認識がでてくるのではないかと論じた。

東京大学の三谷博名誉教授は、国史たちの対話を促進するために、(1) 日本における高校歴史教育課程の改訂について報告し、(2) 日本史教科書の中の世界・東アジア記述の問題点を指摘した。日本の高校では「歴史総合」が必修教科となる予定である。「歴史総合」は、(a) 世界史と日本史を融合させ、(b) 近代史に絞り、(c) アクティブ・ラーニングを推奨する点に特徴がある。しかしながら、このような動向に、学会や教育会が協力するかどうかは未だ明らかではない。日本史の研究と教育において、つい最近生じた隣国との関係悪化は、東アジアの中に日本を位置づけるという研究動向に冷水を注いだ。内外から押し寄せる政治圧力を超えて、長期的に有意味な展開ができるか予断を許さないと述べた。また、長期的には (3) 互いに隣国の国内史を学ぶ必要を強調した。日中韓３国の知識人たちの欧米への関心の熱烈さと、隣国への無関心との対照に深い懸念を抱き、国際関係だけでなく、まず相手の国がどんな文脈を持っているかを知らなくてはいけない、隣国の歴史をわかったつもりにならず、互いに、虚心に学び合う、それ

© 2017 SGRA

が「国史たちの対話」の究極の課題であると結んだ。

韓国、中国、日本の歴史の大家の大局的な講演に続いて、6名の中堅若手の研究者からコメントがあった。

北九州市立大学の八百啓介教授は、中韓日の相違点を指摘して論点整理を試み、東アジアと近代との関係について、(1) ヨーロッパ中心主義としての「近代」「東アジア」への批判、そして (2)「東アジア」概念の妥当性についての諸説を紹介した。

北海道大学の橋本雄准教授は、1402年に執り行われた足利義満による明使接見儀礼を復元し、いかに義満が、明使への配慮や敬意を表しながら、自尊意識を満足させる儀礼に換骨奪胎していたかを詳しく説明した。日本史を描く場合に対外関係史の成果を衍用することは不可欠だが、ただ単に外国史の文脈をナイーヴに読み込めばよいというものではない。双方の文脈に注意しながら各国史料を実証的に突き合わせ、冷静な判断をしていかないと「国史」が偏ったものになってしまうだろう、と指摘した。

早稲田大学の松田麻美子氏は、「中国の教科書に描かれた日本―教育の『革命史観』から『文明史観』への転換―」というタイトルで、中国の歴史教科書の変化について報告したが、習近平政権成立後は揺れ戻しもおきていると指摘した。

復旦大学の徐静波教授は、東アジアの歴史を正しく認識する際、自国の立場に拘泥せずに、もっと広い視野で見る必要があり、または自国の資料だけでなく、出来るだけ各国の歴史資料や考古学の成果を利用して客観的に考察する必要があると指摘した。

高麗大学の鄭淳一氏は、「国史たちの対話」の進展のためには、これまで行われてきた官民レベルの歴史対話の事例をきちんと調べ、「国史たちの対話」プロジェクトとの共通点、相違点を分析し、生産的な課題を引き出していくことが大事であると指摘。また、高校生・大学生レベルでの「対話」あるいは学術交流も視野に入れた若手研究者同士の交流を促進する方法、韓国の高校『東アジア史』の経験を参考にして東アジアにおける「国史」の叙述方式を 皆で考える必要があると提案した。

高麗大学の金囧泰氏は、共通の歴史的事件に関する用語をどう決めるのかという問題をとりあげ、「壬辰倭乱」ではなく「壬辰戦争」という用語がいいと思うが、「韓国の情緒にはまだ早い」という反論があると紹介した。また、「国史教科書」と「国史研究」が持つべき「目標」は、「自信感」「誇り」であったが、それ

© 2017 SGRA

はもう有効な目標ではなく、各国の政治、歴史的な特徴が反映されなければならないと指摘した。

＊＊＊

円卓会議「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性」は、（公財）渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）が、2013年3月にバンコクで開催した第1回アジア未来会議中の円卓会議「グローバル時代の日本研究の現状と課題」を皮切りに検討を重ね、2015年7月に東京で開催したフォーラム「日本研究の新しいパラダイムを求めて」で、早稲田大学の劉傑教授によって提案された「アジアの公共知としての日本研究」を創設するための提案を受けて発展させたものである。本会議は、これから５回は続けるプロジェクトの初回として、第３回アジア未来会議の中で開催された。今後は、テーマを絞りながら、日本人の日本史研究者、中国人の中国史研究者、韓国人の韓国史研究者の対話と交流の場を提供していく予定である。

本プロジェクトのひとつの特徴は言葉の問題である。本会議では、下記6名によって同時通訳が行われた。【日本語⇔中国語】丁莉（北京大学）、宋剛（北京外国語大学）【日本語⇔韓国語】金範洙（東京学芸大学）、李へり（韓国外国語大学）【中国語⇔韓国語】李麗秋（北京外国語大学）、孫興起（北京外国語大学）。今後もできるだけ同じメンバーで続けていきたい。

本会議の講演録は、SGRA レポートに纏め、日本語版、中国語版、韓国語版を発行する予定である。

© 2017 SGRA

講師略歴

■劉 傑／LIU Jie

北京外国語大学を経て、1982年東京大学に入学。1993年東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了、博士（文学）の学位を取得。早稲田大学社会科学部・社会科学総合学術院教授、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授。
専門分野は、近代日本政治外交史、近代日中関係史、現代日中関係論、現代中国論。特に、日中間に横たわる歴史認識問題とその背景に詳しい。
主な著作：『日中戦争下の外交』（吉川弘文館、1995年）、『中国の強国構想―日清戦争後から現代まで』（筑摩書房筑摩選書、2013年）など。

■趙 珖／CHO Kwang

1945年韓国ソウル生まれ。朝鮮時代の思想史、史学史、関係史を専攻。高麗大学校で文学博士を取得。東国大学校国史教育科教授、高麗大学校韓国史学科教授・文科大学長・博物館長、延世大学校碩座教授、韓日歴史共同研究委員会委員長、韓国史研究会会長を歴任。現在、高麗大学校名誉教授、ソウル特別市史編纂委員会委員長。
主な著作：『朝鮮後期社会の転換期的特性』『朝鮮後期社会の理解』『韓国史学史の認識と課題』『朝鮮後期天主教史研究』など。

■葛 兆光／GE Zhaoguang

1950年上海生まれ。1984年北京大学大学院文献学修士課程修了。1992年より清華大学歴史学部教授。2006－2013年復旦大学文史研究院院長、教授。現在同研究院及び復旦大学歴史学部特別招聘教授。京都大学、ベルギー·ルモン大学、台湾大学、アメリカ·プリンストン大学などの客員教授を歴任。2009年第一回プリンストングローバル学者に当選された。
専門分野は中国思想史、東アジア交流史。
主な著作：『中国思想史』、『宅茲中国』、『中国再考』（第26回アジア太平洋賞大賞）など。

■三谷 博／MITANI Hiroshi

1978年東京大学大学院人文科学研究科国史学専門課程博士課程を単位取得退学。東京大学文学部助手、学習院女子短期大学専任講師・助教授を経て、1988年東京大学教養学部助教授、その後東京大学大学院総合文化研究科教授などを歴任。現在、跡見学園女子大学教授、東京大学名誉教授。文学博士（東京大学）。
専門分野は19世紀日本の政治外交史、東アジア地域史、ナショナリズム・民主化・革命の比較史、歴史学方法論。
主な著作：『明治維新とナショナリズム－幕末の外交と政治変動』（山川出版社、1997年）、『明治維新を考える』（岩波書店、2012年）、『愛国・革命・民主』（筑摩書房、2013年）など。共著に『国境を越える歴史認識－日中対話の試み』（東京大学出版会、2006年）（劉傑・楊大慶と）など多数。

■八百啓介／YAO Keisuke

1982年九州大学文学部史学科卒業。1989年九州大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。文学博士。1985/87年オランダ政府給費留学生としてライデン大学歴史学科に留学。1989年度日本学術振興会特別研究員。現在、北九州市立大学教授。
専門分野は日本近世対外交渉史、食文化史。
主な著作：『近世オランダ貿易と鎖国』（吉川弘文館、1998年）、『砂糖の通った道―菓子から見た社会史―』（弦書房、2011年）

■橋本 雄／HASHIMOTO Yu

1972年東京生まれ。1995年、東京大学文学部卒業。2000年、同大学院博士課程単位取得退学。2004年、博士（文学）学位取得。日本学術振興会特別研究員、九州国立博物館設立準備室、同学芸部研究員等を経て、現在、北海道大学大学院文学研究科准教授。専門分野は、中世日本の国際交流史・文化史。
主な著作：『中世日本の国際関係』（吉川弘文館、2005年）、『中華幻想』（勉誠出版、2011年）、『偽りの外交使節』（歴史文化ライブラリー、吉川弘文館、2012年）、『“日本国王”と勘合貿易：なぜ、足利将軍家は中華皇帝に「朝貢」したのか』（さかのぼり日本史：外交篇［7］室町、NHK出版、2013年）など。

© 2017 SGRA

■松田麻美子／MATSUDA Mamiko

早稲田大学大学院社会科学研究科博士課程在学中、修士（国際関係学、中国戯曲文学）。1974年大阪生まれ。1995年中国北京師範大学に語学留学。1998年神戸大学国際文化学部卒業。2002年中国戯曲学院大学院修士課程修了（中国戯曲文学）。2015年早稲田大学大学院アジア太平洋研究科修士課程修了（国際関係学）。同年早稲田大学大学院社会科学研究科博士課程入学。
主な著作：『中国の教科書に描かれた日本―教育の「革命史観」から「文明史観」への転換』（国際書院、2017年）。

■鄭 淳一／CHONG Soonil

1979年、韓国生まれ。2004年高麗大学歴史教育科卒業（文学士）、2007年高麗大学大学院史学科修士課程修了（文学修士）。2008年早稲田大学アジア特別奨学金の支援を受けて渡日、早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程に入学。2011年度渥美国際交流財団奨学生。2013年、早稲田大学大学院文学研究科より博士学位取得。早稲田大学外国人研究員、明知大学（韓国）助教授を経て、2016年9月から高麗大学歴史教育科助教授。
専門分野は日本古代史、東アジア海域史。
主な著作：『九世紀の来航新羅人と日本列島』（勉誠出版、2015年単著）、『日本古代の外交文書』（八木書店、2014年共著）、『古代東アジアの「祈り」』（森話社、2014年共著）など。

■徐 静波／XU Jingbo

徐静波、1956年上海生まれ。1988年復旦大学大学院近代中国文学研究科修士課程修了。現在、復旦大学日本研究センター副所長、教授。また、愛媛大学外国人特別招聘教授、神戸大学大学院国際文化研究科招聘教授、京都大学人文科学研究所客員教授などを歴任。
研究分野は中日文化関係、中日文化比較。
主な著作：『梁実秋――伝統への復帰』（復旦大学出版社1992年）、『東風は西から吹いてくる――日本における中国文化』（雲南人民出版社、2004年）、『日本の食文化：歴史と現実』（上海人民出版社、2009年）、『近代日本の文化人と上海1923-1946』（上海人民出版社、2013年）。その他、共著、編著、訳書多数。

■金 囮泰／KIM Kyongtae

高麗大学校韓国史学科博士課程中の2010年～2011年、東京大学大学院日本文化研究専攻（日本史学）外国人研究生。2014年高麗大学校韓国史学科で博士号取得。韓国学中央研究院研究員を経て現在は高麗大学校人文力量強化事業団研究教授。
戦争の破壊的な本性と戦争が導いた荒地で絶えず成長する平和の間に存在した歴史に関心を持っている。
主な著作：壬辰戦争期講和交渉研究（博士論文）

同時通訳者

【日本語⇔中国語】丁 莉（北京大学）、宋 剛（北京外国語大学）
【日本語⇔韓国語】金 範洙（東京学芸大学）、李 へり（韓国外国語大学）
【中国語⇔韓国語】李 麗秋（北京外国語大学）、孫 興起（北京外国語大学）

© 2017 SGRA

SGRA レポート　バックナンバーのご案内

SGRA レポート01　設立記念講演録 「21世紀の日本とアジア」 船橋洋一　2001. 1. 30発行

SGRA レポート02　CISV国際シンポジウム講演録 「グローバル化への挑戦：多様性の中に調和を求めて」
今西淳子、高 偉俊、F. マキト、金 雄熙、李 來賛　2001. 1. 15発行

SGRA レポート03　渥美奨学生の集い講演録 「技術の創造」 畑村洋太郎　2001. 3. 15発行

SGRA レポート04　第1回フォーラム講演録 「地球市民の皆さんへ」 関 啓子、L. ビッヒラー、高 熙卓 2001. 5. 10発行

SGRA レポート05　第2回フォーラム講演録 「グローバル化のなかの新しい東アジア：経済協力をどう考えるべきか」
平川 均、F. マキト、李 鋼哲　2001. 5. 10発行

SGRA レポート06　投稿 「今日の留学」「はじめの一歩」 工藤正司　今西淳子　2001. 8. 30発行

SGRA レポート07　第3回フォーラム講演録 「共生時代のエネルギーを考える：ライフスタイルからの工夫」
木村建一、D. バート、高 偉俊　2001. 10. 10発行

SGRA レポート08　第4回フォーラム講演録 「IT 教育革命：ITは教育をどう変えるか」
臼井建彦、西野篤夫、V. コストブ、F. マキト、J. スリスマンティオ、蒋 恵玲、楊 接期、
李 來賛、斎藤信男　2002. 1. 20発行

SGRA レポート09　第5回フォーラム講演録 「グローバル化と民族主義：対話と共生をキーワードに」
ペマ・ギャルポ、林 泉忠　2002. 2. 28発行

SGRA レポート10　第6回フォーラム講演録 「日本とイスラーム：文明間の対話のために」
S. ギュレチ、板垣雄三　2002. 6. 15発行

SGRA レポート11　投稿 「中国はなぜＷＴＯに加盟したのか」 金香海　2002. 7. 8発行

SGRA レポート12　第7回フォーラム講演録 「地球環境診断：地球の砂漠化を考える」
建石隆太郎、B. ブレンサイン　2002. 10. 25発行

SGRA レポート13　投稿 「経済特区：フィリピンの視点から」 F. マキト　2002. 12. 12発行

SGRA レポート14　第8回フォーラム講演録 「グローバル化の中の新しい東アジア」＋宮澤喜一元総理大臣をお迎えして
フリーディスカッション
平川 均、李 鎮奎、ガト・アルヤ・プートゥラ、孟 健軍、B.ヴィリエガス 日本語版2003. 1. 31発行、
韓国語版2003. 3. 31 発行、中国語版2003. 5. 30発行、英語版2003. 3. 6発行

SGRA レポート15　投稿 「中国における行政訴訟―請求と処理状況に対する考察―」 呉東鎬　2003. 1. 31発行

SGRA レポート16　第9回フォーラム講演録 「情報化と教育」 苑 復傑、遊間和子　2003. 5. 30発行

SGRA レポート17　第10 回フォーラム講演録 「21世紀の世界安全保障と東アジア」
白石 隆、南 基正、李 恩民、村田晃嗣　日本語版2003. 3. 30発行、英語版2003. 6. 6発行

SGRA レポート18　第11 回フォーラム講演録 「地球市民研究：国境を越える取り組み」 高橋 甫、貫戸朋子　2003.8.30発行

SGRA レポート19　投稿 「海軍の誕生と近代日本－幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」 朴 栄濬
2003.12.4発行＿

SGRA レポート20　第12 回フォーラム講演録 「環境問題と国際協力：ＣＯＰ３の目標は実現可能か」
外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊　2004. 3. 10発行

SGRA レポート21　日韓アジア未来フォーラム 「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」2004. 6. 30発行

SGRA レポート22　渥美奨学生の集い講演録 「民族紛争－どうして起こるのか　どう解決するか」 明石康　2004. 4. 20発行

SGRA レポート23　第13 回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか」
宮島喬、イコ・プラムティオノ　2004.2.25 発行

SGRA レポート24　投稿 「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助：その評価の歴史」 フスレ　2004. 10. 25発行

SGRA レポート25　第14 回フォーラム講演録 「国境を越えるE-Learning」
斎藤信男、福田収一、渡辺吉鎔、F. マキト、金 雄熙　2005. 3. 31発行

SGRA レポート26　第15 回フォーラム講演録 「この夏、東京の電気は大丈夫？」 中上英俊、高 偉俊　2005.1.24発行

SGRA レポート27　第16 回フォーラム講演録 「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」
竹田いさみ、R. エルドリッヂ、朴 栄濬、渡辺 剛、伊藤裕子　2005. 7. 30発行

SGRA レポート28　第17 回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか- 地球市民の義務教育-」
宮島 喬、ヤマグチ・アナ・エリーザ、朴 校熙、小林宏美　2005. 7. 30発行

SGRA レポート29　第18 回フォーラム・第4 回日韓アジア未来フォーラム講演録 「韓流・日流：東アジア地域協力における
ソフトパワー」 李 鎮奎、林 夏生、金 智龍、道上尚史、木宮正史、李 元徳、金 雄熙　2005. 5. 20発行

SGRA レポート30　第19 回フォーラム講演録 「東アジア文化再考－自由と市民社会をキーワードに－」
宮崎法子、東島 誠　2005. 12. 20発行

SGRA レポート31　第20 回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合：雁はまだ飛んでいるか」
平川 均、渡辺利夫、トラン・ヴァン・トウ、範 建亭、白 寅秀、エンクバヤル・シャグダル、F.マキト
2006. 2. 20発行

SGRA レポート32　第21 回フォーラム講演録 「日本人は外国人をどう受け入れるべきか－留学生－」
横田雅弘、白石勝己、鄭仁豪、カンピラパーブ・スネート、王雪萍、黒田一雄、大塚晶、徐向東、
角田英一　2006. 4. 10発行

SGRA レポート33　第22 回フォーラム講演録 「戦後和解プロセスの研究」 小菅信子、李 恩民　2006. 7. 10発行

SGRA レポート34　第23 回フォーラム講演録 「日本人と宗教：宗教って何なの？」
島薗 進、ノルマン・ヘイヴンズ、ランジャナ・ムコパディヤーヤ、ミラ・ゾンターク、
セリム・ユジェル・ギュレチ　2006. 11. 10発行

SGRA レポート35　第24 回フォーラム講演録 「ごみ処理と国境を越える資源循環～私が分別したごみはどこへ行くの？～」
鈴木進一、間宮 尚、李 海峰、中西 徹、外岡 豊　2007. 3. 20発行

SGRA レポート36　第25 回フォーラム講演録 「ITは教育を強化できるか」
高橋冨士信、藤谷哲、楊接期、江蘇蘇　2007. 4. 20発行

SGRA レポート37　第1 回チャイナ・フォーラムin 北京 「パネルディスカッション『若者の未来と日本語』」
池崎美代子、武田春仁、張 潤北、徐 向東、孫 建軍、朴 貞姫　2007. 6. 10発行

SGRA レポート38　第6 回日韓フォーラムin 葉山講演録 「親日・反日・克日：多様化する韓国の対日観」
金 範洙、趙 寛子、玄 大松、小針 進、南 基正　2007. 8. 31発行

SGRA レポート39　第26 回フォーラム講演録 「東アジアにおける日本思想史～私たちの出会いと将来～」
黒住 真、韓 東育、趙 寛子、林 少陽、孫 軍悦　2007. 11. 30発行

SGRA レポート40　第27 回フォーラム講演録 「アジアにおける外来種問題～ひとの生活との関わりを考える～」
多紀保彦、加納光樹、プラチヤー・ムシカシントーン、今西淳子　2008. 5. 30発行

SGRA レポート41　第28 回フォーラム講演録 「いのちの尊厳と宗教の役割」
島薗進、秋葉悦子、井上ウイマラ、大谷いづみ、ランジャナ・ムコパディヤーヤ　2008. 3. 15発行

SGRA レポート42　第2 回チャイナ・フォーラムin 北京＆新疆講演録 「黄土高原緑化協力の15 年―無理解と失敗から
相互理解と信頼へ―」 高見邦雄　日本語版、中国語版 2008. 1. 30発行

SGRA レポート43　渥美奨学生の集い講演録 「鹿島守之助とパン・アジア主義」 平川均　2008. 3. 1発行

SGRA レポート44　第29 回フォーラム講演録「広告と社会の複雑な関係」 関沢 英彦、徐 向東、オリガ・ホメンコ
2008. 6. 25発行

SGRA レポート45　第30 回フォーラム講演録 「教育における『負け組』をどう考えるか～
日本、中国、シンガポール～」佐藤香、山口真美、シム・チュン・キャット　2008. 9. 20発行

SGRA レポート46　第31 回フォーラム講演録 「水田から油田へ：日本のエネルギー供給、食糧安全と地域の活性化」
東城清秀、田村啓二、外岡 豊　2009. 1. 10発行

SGRA レポート47　第32 回フォーラム講演録 「オリンピックと東アジアの平和繁栄」
清水 諭、池田慎太郎、朴 榮濬、劉傑、南 基正 2008. 8. 8発行

SGRA レポート48　第3 回チャイナ・フォーラムin 延辺＆北京講演録 「一燈やがて万燈となる如く―
アジアの留学生と生活を共にした協会の50 年」工藤正司 日本語版、中国語版 2009. 4. 15発行

SGRA レポート49　第33回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合が格差を縮めるか」
東 茂樹、平川 均、ド・マン・ホーン、フェルディナンド・C・マキト　2009. 6. 30発行

SGRA レポート50　第8 回日韓アジア未来フォーラム講演録 「日韓の東アジア地域構想と中国観」
平川 均、孫 洌、川島 真、金 湘培、李 鋼哲　日本語版、韓国語Web 版 2009. 9. 25発行

SGRA レポート51　第35 回フォーラム講演録 「テレビゲームが子どもの成長に与える影響を考える」
大多和直樹、佐々木 敏、渋谷明子、ユ・ティ・ルイン、江 蘇蘇 2009. 11. 15発行

SGRA レポート52　第36 回フォーラム講演録 「東アジアの市民社会と21 世紀の課題」
宮島 喬、都築 勉、高 熙卓、中西 徹、林 泉忠、ブ・ティ・ミン・チィ、
劉 傑、孫 軍悦 2010. 3. 25発行

SGRA レポート53　第4 回チャイナ・フォーラム in 北京＆上海講演録 「世界的課題に向けていま若者ができること～
TABLE FOR TWO ～」近藤正晃ジェームス　2010. 4. 30発行

SGRA レポート54　第37 回フォーラム講演録 「エリート教育は国に『希望』をもたらすか：
東アジアのエリート高校教育の現状と課題」玄田有史　シム チュン キャット
金 範洙　張 健　2010. 5. 10発行

SGRA レポート55　第38 回フォーラム講演録 「Better City, Better Life ～東アジアにおける都市・
建築のエネルギー事情とライフスタイル～」木村建一、高 偉俊、
Mochamad Donny Koerniawan、Max Maquito、Pham Van Quan、
葉 文昌、Supreedee Rittironk、郭 栄珠、王 剣宏、福田展淳　2010. 12. 15発行

SGRA レポート56　第5 回チャイナ・フォーラム in 北京＆フフホト講演録 「中国の環境問題と日中民間協力」
第一部（北京）:「北京の水問題を中心に」高見邦雄、汪 敏、張 昌玉
第二部（フフホト）:「地下資源開発を中心に」高見邦雄、オンドロナ、ブレンサイン
2011. 5. 10発行

SGRA レポート57　第39 回フォーラム講演録 「ポスト社会主義時代における宗教の復興」井上まどか、
ティムール・ダダバエフ、ゾンターク・ミラ、エリック・シッケタンツ、島薗 進、陳 継東
2011. 12. 30発行

SGRA レポート58　投稿 「鹿島守之助とパン・アジア論への一試論」平川 均　2011. 2. 15発行

SGRA レポート59　第10 回日韓アジア未来フォーラム講演録「1300 年前の東アジア地域交流」

朴 亨國、金 尚泰、胡 潔、李 成制、陸 載和、清水重敦、林 慶澤　2012. 1. 10発行

SGRA レポート60　第40 回フォーラム講演録「東アジアの少子高齢化問題と福祉」
田多英範、李 蓮花、羅 仁淑、平川 均、シム チャン キャット、F･マキト　2011. 11. 30発行

SGRA レポート61　第41 回SGRAフォーラム講演録「東アジア共同体の現状と展望」恒川惠市、黒柳米司、朴 榮濬、劉 傑、林 泉忠、ブレンサイン、李 成日、南 基正、平川 均　2012. 6. 18発行

SGRA レポート62　第6 回チャイナ・フォーラム in 北京＆フフホト講演録
「Sound Economy ～私がミナマタから学んだこと～」 柳田耕一
「内モンゴル草原の生態系：鉱山採掘がもたらしている生態系破壊と環境汚染問題」郭 偉
2012. 6. 15発行

SGRA レポート64　第43 回フォーラム講演録 in 蓼科「東アジア軍事同盟の課題と展望」
朴 榮濬、渡辺 剛、伊藤裕子、南 基正、林 泉忠、竹田いさみ　2012. 11. 20発行

SGRA レポート65　第44 回フォーラム講演録 in 蓼科「21世紀型学力を育むフューチャースクールの戦略と課題」
赤堀侃司、影戸誠、曺圭福、シム・チュン・キャット、石澤紀雄　2013. 2. 1発行

SGRA レポート66　渥美奨学生の集い講演録「日英戦後和解（1994–1998 年）」（日本語・英語・中国語）沼田貞昭
2013. 10. 20発行

SGRA レポート67　第12 回日韓アジア未来フォーラム講演録「アジア太平洋時代における東アジア新秩序の模索」
平川 均、加茂具樹、金 雄熙、木宮正史、李 元徳、金 敬黙　2014. 2. 25発行

SGRA レポート68　第7 回SGRAチャイナ・フォーラムin北京講演録「ボランティア・志願者論」
（日本語・中国語・英語）　宮崎幸雄　2014. 5. 15発行

SGRA レポート69　第45 回 SGRA フォーラム講演録「紛争の海から平和の海へ－東アジア海洋秩序の現状と展望－」
村瀬信也、南 基正、李 成日、林 泉忠、福原裕二、朴 栄濬 2014. 10. 20発行

SGRA レポート70　第46 回 SGRA フォーラム講演録「インクルーシブ教育：子どもの多様なニーズにどう応えるか」
荒川 智、上原芳枝、ヴィラーグ ヴィクトル、中村ノーマン、崔 佳英 2015. 4. 20発行

SGRA レポート71　第47 回 SGRA フォーラム講演録「科学技術とリスク社会
－福島第一原発事故から考える科学技術と倫理－」
崔 勝媛、島薗 進、平川秀幸 2015. 5. 25発行

SGRA レポート72　第8 回チャイナ・フォーラム
「近代日本美術史と近代中国」
佐藤道信、木田拓也　2015. 10. 20発行

SGRA レポート73　第14回日韓アジア未来フォーラム、第48回SGRA フォーラム
「アジア経済のダイナミズム―物流を中心に」
李 鎮奎、金 雄熙、榊原英資、安 秉民、ド マン ホーン、李 鋼哲　2015. 11. 10発行

SGRA レポート74　第49回SGRA フォーラム講演録：円卓会議「日本研究の新しいパラダイムを求めて」
劉 傑、平野健一郎、南 基正　他15名　2016. 6. 20発行

SGRA レポート75　第50回SGRA フォーラム in 北九州講演録「青空、水、くらし―環境と女性と未来に向けて」
神﨑智子、斉藤淳子、李 允淑、小林直子、田村慶子　2016. 6. 27発行

SGRA レポート76　第9回SGRA チャイナ・フォーラム in フフホト＆北京講演録「日中二百年―文化史からの再検討」
劉 建輝　発行予定

SGRA レポート77　第15回日韓アジア未来フォーラム「これからの日韓の国際開発協力―共進化アーキテキチャの模索」
孫赫相、深川由紀子、平川均、フェルディナンド・C・マキト　2016. 11. 10発行

SGRA レポート78　第51回SGRA フォーラム「今、再び平和について―平和のための東アジア知識人連帯を考える―」
南基正、木宮正史、朴栄濬、宋均営、林泉忠、都築勉　2017. 03. 27発行

■ レポートご希望の方は、SGRA 事務局（Tel：03-3943-7612　Email：sgra-office@aisf.or.jp）へご連絡ください。

SGRA レポート No. 0079

第52回SGRAフォーラム

日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性（1）

編集・発行　（公財）渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）
〒112-0014 東京都文京区関口3-5-8
Tel: 03-3943-7612　Fax: 03-3943-1512
SGRA ホームページ: http://www.aisf.or.jp/sgra/
電子メール: sgra-office@aisf.or.jp

発行日　2017年6月9日
発行責任者　今西淳子
印刷　（株）平河工業社

ⓒ関口グローバル研究会　禁無断転載　本誌記事のお尋ねならびに引用の場合はご連絡ください。